



人権イメージキャラクター
人KENまもる君



令和5年度 **全国中学生**

人権作文 コンテスト

東京都大会 入賞作品集



人権イメージ
キャラクター
人KENあゆみちゃん

東京法務局 東京都人権擁護委員連合会

令和5年度 全国中学生人権作文コンテスト 東京都大会 入賞作品集

人権相談はこちらへ

相談は、人権擁護委員又は法務局職員がお受けします。

人権についての全般的な相談はこちら
みんなの人権110番

(全国共通)

ゼロゼロみんなのひやくとおぼん

0570-003-110

差別や虐待、パワーハラスメントなど、様々な人権問題についての相談電話です。
電話は、おかけになった場所の最寄りの法務局・地方法務局につながります。

常設相談所

- ◎ 東京法務局人権擁護部
- ◎ 東京法務局府中支局
- ◎ 同 八王子支局
- ◎ 同 西多摩支局

子どもに関する相談はこちら
子どもの人権110番

(全国共通・通話料無料)

ゼロゼロなのひやくとおぼん

0120-007-110

学校でのいじめ、虐待など、子どもの人権問題に関する専用相談電話です。

女性に関する相談はこちら
女性の人権ホットライン

(全国共通)

ゼロナナゼロのハートライン

0570-070-810

パートナーからの暴力、職場でのセクハラなど、女性の人権問題に関する専用相談電話です。

【相談時間】月曜日～金曜日(休日を除く)の午前8時30分～午後5時15分

LINEじんけん相談 LINEでも相談を受け付けているよ



@snsjinkensoudan

検索



こちらから友だち追加してください▶

インターネット人権相談 子どもの人権 SOS-eメール

インターネット人権相談

検索

<https://www.jinken.go.jp/>



外国語による人権相談

東京法務局人権擁護部

0570-090911

英語・中国語・韓国語・フィリピン語・ポルトガル語・ベトナム語
ネパール語・スペイン語・インドネシア語・タイ語

【相談時間】

平日午前9時～午後5時

東京法務局 東京都人権擁護委員連合会

はしがき

東京法務局と東京都人権擁護委員連合会は、次代を担う多くの中学生に人権問題に関する作文を書くことを通じ、互いの人権を尊重することの大切さについて理解を深め、豊かな人権感覚を身に付けてもらうことを目的として、昭和四七年度から、都内の中学生を対象とした人権作文コンテストを実施してまいりました。また、昭和五六年度からは、法務省及び全国人権擁護委員連合会が主催する「全国中学生人権作文コンテスト」が実施されることとなり、毎年、数多くの作品が寄せられています。

本年度においても、東京新聞と共催し、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、公益財団法人人権擁護協力会の後援をいただき、東京都大会を実施しましたところ、都内二九一校の中学校と外国人学校から、三万六、五三二編に上る作品が寄せられました。

本作品集では、入賞作品三十四編を紹介させていただきました。いずれも中学生らしい純粋な感覚で人権課題をとらえた作品です。より多くの方々にお読みいただき、人権尊重思想の普及高揚が図られることを願っております。

終わりに、本年度の東京都大会実施に当たり、熱意をもって応募された中学生の皆さんを始め、多大な御理解と協力を賜りました各中学校、外国人学校、東京都教育委員会、一般財団法人東京私立中学高等学校協会、公益財団法人人権擁護協力会、東京都教育庁、各区市町村教育委員会、各区市町村人権擁護事務担当者の皆様方、共催いただいた東京新聞に、厚く御礼申し上げます。

令和五年一二月

東京法務局
東京都人権擁護委員連合会

目次

〔入賞作品〕

最優秀賞（東京法務局長賞）

おばあちゃん的笑顔……………墨田区立両国中学校 二年（非公表）……………4

最優秀賞（東京都人権擁護委員会会長賞）

太陽への願い……………東久留米市立大門中学校 三年 若林友惟……………6

最優秀賞（東京新聞賞）

違いを認め合う心……………渋谷区立笹塚中学校 一年 豊山由紗……………8

特別優秀賞（東京都教育委員会賞）

自分の心に正直に……………国分寺市立第四中学校 二年 成川心晴……………10

優秀賞

最高の薬とは……………豊島区立西池袋中学校 三年 坂田裕奈……………12

障害の大小に関わらず……………神津島村立神津中学校 三年 松江つむぎ……………14

犯罪者に関する人権問題……………昭島市立拝島中学校 二年 古川はな……………16

認め合いたい、「人と違う」自分……………日野市立日野第二中学校 二年 渡辺愛友子……………18

知ることから始めよう……………調布市立神代中学校 二年 武居もも……………20

一緒に練習しよう……………西東京市立田無第一中学校 二年 尾花友希……………22

「バリアフリー」な助け合い……………西東京市立ひばりが丘中学校 二年 保泉妃那……………24

ダウン症の兄……………あきる野市立西中学校 二年 中村時文……………26

私が見つけた居場所……………羽村市立羽村第一中学校 二年 吉澤未采……………28

奨 励 賞

壁を作らないために	港区立三田中学校	三年	遠藤 壹平	30
特別ではない普通の僕	台東区立上野中学校	一年	(非公表)	32
個性を認め合う世界へ	台東区立御徒町台東中学校	三年	高尾 さくら	34
やさしい祖母	板橋区立鉢山中学校	三年	嶋 貫 主 博	36
「可哀想」は偏見	板橋区立桜川中学校	二年	(非公表)	38
家族のかたち	江東区立深川第七中学校	二年	吉 田 希 望	40
知ってもらうこと、理解してもらうこと	大島町立第一中学校	一年	青 柳 杏 奈	42
「手を繋いでまろくなろう」	立川市立立川第七中学校	三年	木 中 希 音	44
自分の心を見つめて	東大和市立第二中学校	二年	木 村 知 暁	46
「人権」が教えてくれる大切なこと	武蔵村山市立第一中学校	二年	栢 下 琴 海	48
ふつうの家族	武蔵村山市立第一中学校	二年	鈴 木 栞 乃	50
私が私らしく生きていくために	武蔵村山市立小中一貫校大南学園第四中学校	三年	丸 山 蒼 葉	52
第一歩	日野市立七生中学校	三年	塚 本 エ ミ リ	54
「知ろうとする」ことの大切さ	町田市立南大谷中学校	一年	蓬 田 怜	56
ひめゆりの塔で考えたこと	稲城市立稲城第四中学校	二年	玉 城 茉 央	58
あたたかい社会をつくりたい(偏見で生まれる心の冷たさ)	府中市立府中第二中学校	三年	徳 原 ゆ り	60
起立性調節障害が気づかせてくれたこと	府中市立府中第七中学校	三年	黒 島 愛 子	62
他人ごとからじぶんごとへ	小金井市立小金井第二中学校	二年	森 永 琴 美	64
支えとなるもの	三鷹市立第二中学校	二年	嶋 田 有 佐	66
私の活動から見つかった、「生徒の権利」	三鷹市立第二中学校	三年	勝 間 田 夏 希	68
何気ない一言を意識して	白梅学園清修中学校	一年	養 父 さ くら	70
片腕の剣士	日本体育大学校華中学校	一年	柳 川 美 海	72
身近な平等	瑞穂町立瑞穂中学校	三年	齋 藤 早 和 子	74

最優秀賞

(東京法務局長賞)

おばあちゃん的笑顔

墨田区立両国中学校 二年

(非公表)

「ママがああなつたら、お願いだから施設に入れてね。泣いても怒っても構わずに入れるのよ。」母は私と姉に言います。「じゃあ今のうちにどこの施設がいいか選んでおいてよ。」と姉が言い「一番安い所でもいいって言うてるじゃん。」と母が答え、みんな笑ってそこで会話は終わります。

「ああなつちやつた」のは父の母、私の祖母です。なつてしまったのは認知症です。

一年前の事です。「なんでそうゆう話になるんだよ。昨日言つたじゃねえかよ。」普段温厚な父が、電話口で声を荒げていました。電話の相手は祖母でした。電話からうつすらと漏れ聞こえる祖母の様子は、父にどなられても言い返すでもなく、落ち込むでもなく、状況を理解しているのかいないのか、といった反応で、それがますます父を苛立たせているように感じました。電話を切る

と大きなため息をつき、父は言いました。「ばあちゃんの様子がおかしいんだよ。」

父は現在単身赴任中です。月曜の朝実家に停めてある車で赴任先へ向かい、金曜の夜に帰ってきます。そのため、コロナ禍で会う機会が減っていた祖母に、毎週会うようになりました。そのうち、単なる老化とは思えない祖母の変化を感じた父は、私や母に祖母を会わせて確かめようと、帰ってきた時に祖母と約束をしたのです。「明日の昼みんなで来るから、いっしょにお昼御飯を食べよう。」と。先入観を持たずに会って判断してもらいたかったと、祖母の様子については知らされていませんでした。何かおかしいと思うのか、父の思い過ごしか、父にとつて重要な意味を持つ食事会になるはずでした。祖母はその約束を覚えておらず、父の計画は丸つぶれとなりました。それで思わず感情的になってしまった、というのが事の成り行きでした。

父の期待も虚しく、祖母は認知症でした。「よかつたら食べて。」祖母がお菓子を用意してくれました。「今お腹が空いてなくて。」と断ると、その時は納得するのですが、その二分後、また三分後と「よかつたら……。」と勧めてくるのです。何度も何度も……。私はどうしたらいいかわからず、下を向いたままただただ時間が過ぎるのを待っていました。その時間はとても長く感じら

れました。

それから時が過ぎて状況は変わりました。祖母の症状は確実に悪化し、苛々しがちだった祖父や父は、祖母が認知症であるという現状を受け入れるようになりまし。父は時間が許す限り祖母を散歩やカラオケに連れ出し、穏やかに根気強く祖母の相手をしています。祖母はその事を翌日には忘れてしまいます。だったら父の行動には何の意味があるんだろう、と思っていました。でも認知症の人は、物事の事実関係は忘れてしまっても、その時の感情は心に長く残るのだそうです。父の行動は決して無駄ではないのです。

夏休み中、祖母とババ抜きをしました。母、姉、私の三人がかりで、何度も何度も説明しました。「ババ抜きも出来なくなっちゃったんだ」という私達のシヨックをよそに、祖母は終始上機嫌でした。「もう一回やろう」とせがんでくる様子は、小さな子供のようでした。でも私と姉がひと足先に帰り一時間もすると、私達がいたこと、トランプをしたこと、祖母は何ひとつ覚えてなかった、と後から戻った母から聞きました。でも、たとえ一瞬だけでも祖母が楽しんでくれたのであれば、あの時間は無駄ではない、と実感できた、とても貴重な体験でした。これからは父まかせ、祖父まかせではなく、私も出来る限り祖母の話し相手、遊び相手になろうと思いまし

た。

セルフレジ、QRコード、タッチパネル、コロナ禍の三年で、これらのものは急速に日常に根付いたように感じます。便利なものではありませんが、逆に生活しづらくなったと感じている人も多いと思います。認知症の人はもちろん、高齢者だったり、障害者だったり、苦手意識を持つている人は少なくないでしょう。利便性だけを追い求めて社会的弱者と呼ばれる人達が取り残されることのないよう、最大限の配慮が必要だと思います。

ある認知症の人が「自分達が失敗する権利を奪わないで欲しい」と訴えた事があるそうです。りんごを頼んだのにキャベツを持ってきてしまっても、コロツケだと思つて買ってきた物がカレーパンだったとしても、八年前に亡くなったひいおばあちゃんを「ちよつと探してくるわ」と家を出て行ってしまつても、出来ない事わからない事を叱らず、出来ないだろうわからないだろうと支援し過ぎず、相手が認知症であっても、認知症だからこそ、本人の意思を最大限尊重することが大切なのだと思います。

次におばあちゃんと会つた時は、何をして遊ぶのかな。

ママごめんね。悪いけど施設には入れないよ。

最優秀賞

（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

太陽への願い

東久留米市立大門中学校 三年

若林友惟

「みんなと光の中を胸を張って歩ける。もう私はうつむかないでいい。太陽は輝いた。」

これは、平成十三年、熊本でのハンセン病に関する裁判で、原告が勝訴の感動をつづった詩です。私はこの詩を初めて読んだ時、稲妻のようなものが体内を駆け巡った感触を今でも覚えています。

ハンセン病と聞いて、真っ先に思い浮かぶのはなんでしょう。私は、以前本で読んだホテル宿泊拒否事件を思い出しました。当時はハンセン病に対して世間の関心が高まりつつあり、この事件は多くの人の心に残っていると思います。事件では、熊本のあるホテルで、以前から予約していたハンセン病患者の方々からホテル側から宿泊を拒否され、事件の委細を知らない多くの人々が誹謗中傷をし元患者に大きな傷を残しました。

なぜ、このような悲痛な事件が起きるのでしょうか。

私は、当時の社会、そして今でも多くの人がハンセン病についての正しい知識を持っておらず、その上興味を持たず知らうともせず、「偏見」で見たり、考えてしまっているからではないかと思います。「無知は無理解を生み、無理解は憎悪を生む」という言葉がありますが、まさにその通りだと思います。そしてその憎悪が生み出す物は、人を傷つけるものばかりです。

ハンセン病とは、らい菌と呼ばれる細菌に感染することとで皮疹や末梢神経障害を引き起こす病気のことです。現代で感染する人はほとんどいませんが、かつて患者やその家族に対してされた不当な偏見や差別は人権を侵害し、傷つけるものでした。政府が当時行なった隔離政策などは、人々の間に「ハンセン病は恐ろしい病気なのだ」という悪いイメージを植えつけてしまったのです。それに屈せず立ち上がる人々はおおり、「ハンセン病は治る病気だ。政策を中止するべきだ」という声は挙がったものの、患者の家を雪のように白く消毒する、遠く離れた島へと追いやるなど患者たちは、生涯の自由を奪われ孤独な生活を強いられました。

私は、あの日のことを鮮明に、昨日のように思い出せます。あの日、私は母に連れられ、ハンセン病の方が隔離されていた施設に赴きました。なにも分からなかった私でも、その広大な土地に静かに流れる「想い」を感じ

取ることができました。人一人おらず、まるで悲痛な歴史に取り残されたかのように、無機質に白で塗られた施設は、なにかを待っているように見えました。その日、私がたどどしくつづった日記には、こう書いてありました。

「そこに住んでいた人たちの悲しい気持ちを感じた。さびしい場所だった。」

今考えれば、悲しいという一言で片付けられるような事ではなくても自分の肌で直に触れ、空気を感じたあの日は、私の人生の中でも大きな意味をいつまでも持つと思っています。

私は今日、ハンセン病の患者によって書き記された詩集があることを知りました。

「あなたが生きているように私も生きる。私も生きるようにあなたも生きる。」

『生きるということ』という詩に綴られているこの文章。たった数行のこの文に、私は大きな原動力を感じました。偏見と差別に人生を支配され、希望を失いそうになつた筆者の失われることのない「生きること」への希望。消えることの無い燈。そして、「私たちのような思いをする人が二度と現れませんか」という切実な願いは、私たちが引き継いで考え、自分たちにできることを考え、実践していくべきだと思えました。

ハンセン病患者の方々が浴びた人を傷つける言葉は、今の社会、よりたくさんの人々を苦しめているように感じます。ネット上にあふれる残酷な言葉は絶えることは無く、人々のエネルギーや大切なものを奪っていきます。過去の過ちをくり返さないためにも、お互いのことを思いやった言動ができること誤解から生まれる煩悶も減ると思っています。また、現代、あまり人々に知られておらず偏見を持たれているハンセン病を無くすために、私はハンセン病は感染力が極めて低く治る、などといった正しい知識を得ること、資料館などを訪ねることが大切だと思えます。当たり前だと感じてしまう家族、友人などの身近な存在が当たり前でなく、筆舌に尽くしがたい思いをした人がいるということ、私たちの行動一つ一つがそんな人たちに笑顔や希望を与えたいと思えます。

「みんなと光の中を胸を張って歩ける。もう私はうつむかないでいい。太陽は輝いた。」

全ての人々が太陽の下を笑顔で歩くために。

最優秀賞

(東京新聞賞)

違いを認め合う心

渋谷区立笹塚中学校 一年

豊山由紗

「君の気のせいじゃない？」

これは小学生の頃、いじめに合っていることを、先生に相談した時に言われた言葉だ。予想外の言葉だったので、まずびっくりした。そして血の気が引いていく感じがした。歯をくいしばっていいないと涙がでてきそうだった。もう話せない。「分かりました。」と言って話を終わらせた。

私には持病があるので、小学生の頃からあまり学校へ通えなかった。行ける日でも親と一緒に登校していた。病気の事はみんなに説明している。ただ休みがちで、人とは違う学校生活だったので、何か言われるかもと常に心配だった。悪い予感の中し、ある日突然集団で無視が始まった。あいさつしても、話しかけても徹底的に無視される。気のせいと思いたかった。けれど一緒に来ている親も、確認出来るほどになってきた。もうダメだと

思い、先生に相談すると「無視する子は悪いよね。それでも君からのあいさつは続けてほしいな。相手からあいさつが返ってこないからといって、こっちもやめたらダメだよな？」となぜかダメ出しされた。努力するのは私の方なのか。私は先生に頼ることをやめた。スクールカウンセラーと面談もしたが「家の中で楽しみを見つけてみて。」というアドバイスだけで終わった。

しばらくは何もする気が起きず、悲しい気持ちでいっぱいだった。私が学校へ毎日通えないのはしょうがない事。誰かがそういう私を見て、イヤな気持ちになるのは止められない事。理解してほしいと言ったところで、当人にならないと本当に理解する事は出来ないだろう。どうすればいいのか。散々考えたあげく、良い答えは出ないと分かった。そして時間があったくないと気づいた。こんな事で悩んでるのって私、バカじゃないの。命にかかわる事でもないのに。私は人の顔色を伺って生活するつもりだったのか。私はそんなに弱いのか。悲しい気持ちはなぜか怒りに変わり、我に返った気がした。

「価値観や正解は人によって違うから、自分だけが正しいと思っただけじゃない。努力をしても話の通じない人がいたら、戦わず距離をおきなさい。」と言われたことがある。もしかしたらいじめの側にも理由があり、それがその人の正解なのかもしれない。でも私たちは人間

で、頭でしっかり考え、口に出して相手に気持ちや伝えられる。そして相手の立場を想像する事だ。出来る。それをせずに相手を攻撃するのは、もはや話を通じる人間とは思えない。側にいると、傷が深くなるばかりだろう。だから距離を置き、逃げるしかない。そしてその先には、受け入れてくれる場所が必要だ。それは家族の元であればいいし、理解が得られなければ、分かりやすくアクセス出来る、フリースクールのような場所が必要だと思う。

中学一年生の私は、非力で自分の身の周りの事で精一杯だ。でもやりたい事や将来の夢がある。叶えるために、今やらなければいけない事も分かっている。人に振りまわされているヒマはない。自分で自分を大切にすべきだ。

「人が人らしく生きる権利」自分の人権を守るためには、自分も他人の人権を守らなければならない。まず人を傷つけない事。自分と違う境遇、自分と違う考え方や意見を認める心を持つ。納得が出来なくても、理解する努力をしてみる。「そういう物の見方があるんだ。」「私ではその意見は思い付かなかった。」と相手との違いを、ポジティブに楽しむ事がとても大切だと思う。そうすれば相手も心を開き、受け入れてくれるだろう。

「多様性を尊重する」とニュースでよく耳にする。こ

れから日本は人口が減って、外国人が増えていくのかもれない。そうなるとなおさら柔らかい心で、人種を越えて他人を理解し、尊重する心を持たないと、世の中がうまくまわらないだろう。排除するのではなく、受け入れる。今は未来につながっている。私たちはその準備の真っ只中にある。多様性を受け入れ成長していこう。そしてみんなが平等で、生きやすい世の中を、アイデアを出し合い作っていかねばいけないと思う。



特別優秀賞

(東京都教育委員会賞)

自分の心に正直に

国分寺市立第四中学校 二年

成川心晴

「人権」人が人として、社会の中で、自由に考え、自由に行動し、幸福に暮らせる権利。

私は、「人権」について考えてみた。じっくり向き合うことで、今までモヤモヤとしていた心に、一筋の光が差し込んだ。

小学生の頃は、簡単にできていたことが、中学生になると、簡単ではなくなった。

電車で、お年寄りや妊婦さん、困ってる人が近くに乗りしてきた時、「どうぞ」と声を掛ける、行動する勇氣がない。

勇氣をだして、席を譲ろうと立ち上がるが断られてしまった。シヨックだった。

また断られるんじゃないかと思うと、声が出ず、見て見ぬふり。「これじゃダメだ」と自問自答する毎日を過ごしていた。その答えにつながる出来事であった。

それは、母と二人、帰省したときのこと。

認知症の祖母と脳梗塞の後遺症で左半身にマヒがある祖父は、デイサービスや周囲の助けを受けながら、今まで二人で過ごしていた。

しかし、祖母が自宅で転倒し、骨折。今は、自宅での生活ができるようになることを目指し、リハビリ施設で過ごしている。一人で過ごしていた祖父も転倒し、左目の上を八針縫うケガをした。祖母と二人で過ごすことが祖父の生きがい。これまで頑張っていたのに力を落としているのではないかと心配だった。

久しぶりに会った祖父は、元気で安心した。ご飯の支度をする姿に驚いた。私が手伝おうとすると、祖父はこう言った。

「自分で出来ることは、せんといかん。こんくらいしか、おじいちゃんはできんとよ。」

胸が詰まる思いがした。祖父は、左にマヒがあっても、自分の力で、今を懸命に生きている。すごいと感じた。と同時に、席を譲ろうとした時に断られた時のことを思い出した。

私は断った人の気持ちを考えたことはなかった。断られた自分の気持ちばかり考えていたことに、祖父の言葉で気づいた。

帰省から戻る朝、台所で祖父は、母と私のために鮭を焼いていた。杖を支えに右手だけで。その祖父の背中

は、たくましかった。

「おじいちゃんありがとう。美味しいよ。」

私は、感謝を伝えた。祖父の満面の笑みが心に刺さる。自分がやりたいように行動してごらん。そうメッセージをもらった気がした。

さらに、「人権」への興味は深まってゆく。帰りに乗車した電車は、混み合っていないが、二人で座れる席がなく座った母の前に私は立っていた。すると、正面に座っていた女性が

「隣空いてますので、変わりましょうか」

と私に声をかけてくれた。戸惑い、驚いた。中学生だよ。元気だよ。大丈夫なのにと思ったが、お礼を言つて、母と並んで座った。席を変わった女性は、優しく微笑んでいた。

次第に席は埋まった。次の駅では、お年寄りが乗車し、私は咄嗟に立ち上がろうとした。しかし、すぐに若い男性が、スツと立ち上がり「どうぞ」と席を譲った。その様子を観察するように見ていると、次の駅に到着した。

ドアが開くと、女性がベビーカーを押して降りようとしていた。作業服を着た強面の男性と女子高生が、駆け寄り、ベビーカーを持ち上げ電車から降ろした。二人共、何事もなかったかのように、元の席に座った。

席を変わってくれた女性、席を譲った男性と座ったお年寄り。ベビーカーを持ち上げた二人の乗客と、降りてホームを歩く女性。

私は、助けた人、助けられた人、それをみていたみんなの顔を見渡した。みんなの表情が、祖父の満面の笑み

と重なる。そして、車両全体に、優しく温かな空気が流れているのを感じ、幸せな気分になった。

幸福について調べてみると、世界で幸福度が一位の国はフィンランドだと知った。フィンランドの人は、人は人、自分は自分といった考えで、平等でオープンな人間関係。更に自分の心の声に、素直に生きていて、自分で考えて答えを出していく。その自由さ、シンプルさが、幸せの秘訣ではないかとある。

私のモヤモヤした心は、パツと晴れた。フィンランドの人、私の祖父、電車の乗客、共通していることは、自由に考え、自由に行動する。最初に「人権」を調べた時の言葉だ。これこそが幸福につながるのだと私は思った。

差別・偏見・いじめ。新聞やニュースでは日々伝えられる問題。私が生きている社会で一生なくならない問題だと思ふ。なぜか、このような問題は大きく取り上げられ、見聞きする私は、毎日心が痛む。

逆に、私が経験した小さな幸せは取り上げられない。きつと、小さな幸せに出あえた人は、沢山いると思う。この世の中の人々に、幸せがもっと広がることを私は願う。相手の気持ちを考え、見てるだけでなく勇氣を出して声をかけてみよう。自分の心に正直な行動こそが、自分を幸せにし、相手も幸せな気分にしてくれる。そう信じて、一步を踏み出すことにした。

祖父の満面の笑みが沢山の人に届くために。

優秀賞

最高の薬とは

豊島区立西池袋中学校 三年

坂田裕奈

国連が採択した「児童の権利条約」第一部第十二条に、「児童の意見はその児童の年齢及び成熟度に従って相応に考慮されるものとする。」と書かれています。しかし、病気の子どもたちの場合はどうでしょうか。患児（子ども患者）に関しては、体調と病気の治療が最優先とされます。けれども本人が何かをやりたいと望んだとき、「体調が最優先だから。」とその機会は先送りにされます。このとき、本当にその児童の権利が守られているといえるのか、私は疑問に思います。病気の子どもたちがやりたいと望むことは、優先順位が必然的に低くなってしまっているように思います。病児ひとりひとりの本当にやりたいことが実現できることが、本当に権利を守ることになるのではないかと考えます。病児の権利について、私の二つの体験談を交えて、お話しします。

ひとつめは、病児が教育を受ける権利を守ることで、

痛みやつらさから解放される時間を得られることについてです。私は小学五年生の夏に血液のがんになり、治療のためにある大病院に入院しました。私が入院していた小児病棟には、長期入院をする子どもたちが入る院内学級があり、特別支援学校の先生が病棟に来て授業をしていていました。患児のストレスにならないように、ゆつくりとしたペースで遊びを交えた授業をしていていました。また、私の病院では感染症対策により、先生が直接病室に来て、一対一で勉強することができました。このことより、先生をとて近づくに感じることができたし、ただでさえ人と会うことが少ないので、話しているだけでも時間を忘れられました。しかし、勉強するほかに、もっとやりたいと思うようになり、早く元気になりたい気持ちが出てきました。私としては、勉強が楽しくなって友だちに追いつきたいと思ひ、夢中になって勉強しました。更に、病気に全く関係ないことを学ぶので、異世界に飛び込むような気分になれ、痛みや副作用を忘れることができました。

ふたつめは、病児の意見を尊重する権利を守ることで、彼らの中で生きるエネルギーが湧くことについてです。私が無菌室にいるとき、母や看護師さん、病院のスタッフの方々が私のやりたいことを叶えてくれました。例えば歌うこと、絵を描くこと、映画を観ることなどで

す。特に私の心に残っていることは「アイドルごっこ」です。それを母から提案されたとき私は、生死の境を彷徨う最悪の状態でした。でも私はやりたいとずっと思っていたので、実現することになりました。その日は非常に具合が悪かったこともあり、断片的な記憶しかありません。しかし、看護師さんや主治医の先生が「素敵だね。」と言ってくれたことが最高に嬉しくて、楽しかったことは覚えていません。今、当時のことを思うと、これはあのかの私にとって、副作用と立ち向かおうとするモチベーションに繋がっていたと思います。更に、ドレスアップして写真を撮ったり、先生方と他愛のない話で盛り上がったりで、その瞬間でも過酷な日々を忘れられたと感じています。

私が抗がん剤治療などの副作用に苛まれているとき、母や病院のスタッフの方々が私のやりたいことを叶えてくれました。私の体調が落ちついたときには、院内学級の先生方が体調に配慮しつつ、「勉強がしたい」という願いと一緒に叶えてくれました。このようにやりたいことがどんな内容でも、それらを叶えることで患児の治療への活力に繋がったり、痛みを忘れられる、いい意味での現実逃避ができます。それらは、病児たちの生きる希望、生きたいと願う気持ち、そして何より人生の質を、高めることができます。要するに、病児たちの望みを叶

えることは、最高の薬となるのです。

健康な子どもたちと違い、病児たちは命を守られる権利が最優先に考えられます。しかし時には、願いを叶える権利を最優先に考えてほしいと望む子もいます。もちろん、命が一番大切だと分かっています。ただ、生死を彷徨うような病を持つ当事者である私は、やりたいことをする権利が守られることで、心の中に生きる希望が芽生えることがあるのだと、強く、強く、信じています。それが「児童の意見はその児童の年齢及び成熟度に従って、相応に考慮され、一人の人間として最大限に尊重され守られる」ことになると思っています。



優秀賞

障害の大小に関わらず

神津島村立神津中学校 三年

松江 つむぎ

視力が低いから眼鏡やコンタクトを使う、耳が聞こえにくいから補聴器を使う。それは普通のことであんなに、身体の不自由なところを補助してくれる道具や設備を当たり前のように使用することができています。

私の兄は障害をもっており、自由に体が動かさなかつたため、小学校低学年頃から車いすを使用して生活していました。家の中ではキャスターのついたいすに座って移動し、トイレやお風呂は両親が主に、時々兄弟の私たちが手伝っていました。私が小さいときから兄は車いすに乗って外に出て過ごしていたのでそれが日常であり、特に何か思うこともありませんでした。しかし、車いすに乗る人の生活には大変なことが多くあります。私たちが家族が住む神津島は小さな離島で、電車などなく移動は車か徒歩です。また、坂道が多いため兄が乗った車いす

を押しながら歩く父は大変そうでした。けれど、兄が高校に入った頃くらいに電動車いすに変えたことでそれらだいが楽になっていました。車いすに乗る人が特に大変なのは遠出のときだと思います。家族旅行に行く際、車いすの人も受け付けてもらえないかを必ず両親は調べていました。行こうと言っていた場所の中には車いすが入れないという場所もいくつかありました。その度に「なぜだめなんだ。」とも思いましたが、道や動きの都合上仕方ないことだとは理解できます。それでも、障害のある人や車いすに乗る人が他の人より行けるところが限られるのは嫌だなと思いました。

小学校三年生になったくらいから私は兄といるときの周囲の目を気にするようになりました。島内に住んでいる人は知り合いが多く別に気にすることはありませんでしたが、夏に観光客の方とすれ違ったときや、内地に行ったときなど、兄の車いすに目を向ける人は多くいました。今思えば、すれ違った人たちはただ不思議に思っている、なんとなく見ていただけだったのでしょう。でも当時の私はそれがとても嫌で恥ずかしかったのです。自分が見られているわけでもないのにです。そんなこともあって一時期兄に少しきつくあたるときもありました。思い返せば相当自分勝手に失礼だったと思います。私が小学五年生になった年に兄は亡くなってしまったため当

時どんなことを思っていたかは聞けませんでしたが、ひどい妹だと思っていたでしょう。

兄を近くで支えてきた母は今、島の地域活動支援センターで働いています。ある日、その利用者の方と母が話しているとき、母の言葉がとても頭に残りました。「目が悪い人は眼鏡をつけるけど、それを貸さとかかわいそうなんて言わないでしょ？ 車いすを使っている人も同じ。」と母は言っていました。目が悪い人が眼鏡を使うように、足が自由に動かないから車いすを使っているだけなんだと言いました。横で聞いていた私は確かにそうだと思います。世界には障害がある、他の人とは違うというだけで差別やいじめを受けている人がいます。実際に日本にもそのようなニュースが流れることがあります。また、車いすに乗っているから「かわいそう」などの声をかける人もいます。ですが、そのような言葉や、私が昔兄と歩くときに思っていた「恥ずかしい」という気持ちも障害のある方からすれば差別とも思われるのではないでしょうか。母の言っていたように眼鏡をかけている人にかわいそうとは思いません。でも、車いすを使う人も自分の不自由なところを補うために車いすを使っているだけであり、その人がもつ障害が小さいか大きいかわいそうだけの違いなんだと思います。だから、かわいそうなんて思うことがなければ、恥ずかしい

と思う必要ありません。ただ、目が見えにくそうだったら教えてあげるように、車いすに乗っていて困ってそうだったら手を貸すなどのことは必要です。誰しも困ることはあり、助けを求めるときはあります。そんな風に、障害の大小関係なく、みんなが同じ一人の人間として手を取り合えるようになれば、多くの人が生きやすい社会になると思います。



優秀賞

犯罪者に関する人権問題

昭島市立拝島中学校 二年

古川 は な

人権とは、人が人として、幸福に暮らすために「誰もが生まれながらに持つ権利」「必ず守られるべきもの」そう教わってきた。しかし現実では、男女差別、高齢者・児童虐待、難民問題、性的マイノリティに関する問題など多くの人権問題がある。今回取り上げるのは、犯罪や非行をした人に関する人権問題だ。

今回、このことについて作文を書こうと思ったきっかけは、東京拘置所の刑務官として長年勤めている祖父の話をもとに聞いたことだ。拘置所とは、主としてまだ刑事裁判が確定していない未決拘禁者を収容する施設のことである。祖父はそこで、刑務官として約四十年間働いてきた。たくさんの未決拘禁者や死刑確定者と関わってきた。

その中で犯罪を犯した人を見下し、無礼な対応をする刑務官を、祖父は叱り飛ばしていたそうである。「罪を

憎んで人を憎まず」という言葉があるように、犯罪を犯したくて犯しているものはいない。だから決して見下すことなく、その人の良心を信じて接することを大切にしてきたという話だった。

この話が、私の心にとでも響いた。なぜなら、私はそれまで、犯罪者のことを軽蔑していたからだ。犯罪者は時に善良な市民を恐怖に陥れ、平穏な生活を奪っていく。だからできれば社会に戻ってきて欲しくないというのが正直な気持ちだった。だからこそ、祖父の考え方は凄いと思ったし、それまで犯罪者のことを一概に悪い人間と決めつけ、軽蔑していたことを反省した。祖父の話聞いて、私も祖父のように、どんな人にも備わっている善良な心を信じ、温かい言葉をかけてあげられる人間になりたいと思った。

それから私は、犯罪や非行をした人が、地域社会に出てどのように対応されているかなどを調べた。すると、犯罪を犯した人がその過ちを悔いて心を入れ替え、社会に戻ろうとしていることや、無実なものにも関わらず罪を着せられている人がいることも分かった。

刑務所から出所して、地域社会に戻った人は、立ち直りを目指して生活していくことになる。しかし、出所してから五年以内に再び刑務所に入所する人の割合は、四十九・二パーセント。その理由として挙げられるのが、

出所してから住居すら見つからなかったことや、仕事に就くことが出来なかったことだ。実際に、刑務所再入所者の七割が無職だったそうだ。これらの背景には、出所者に対する偏見や差別感情からくる、社会的環境が大きく影響している。特に、アパート等の入居を拒否されたり、職場で不当な扱いを受けたりすることで、出所者は立ち直るチャンスを失ってしまう。また、周囲からの嫌がらせや差別的言動など、本人の人権自体を否定するような扱いを受けることで、出所者の更生意欲が失われる。だから、せつかく出所しても、また再犯の道に走ってしまう人がいるというわけだ。

また、無実であるのに犯罪者として扱われる、「冤罪」が起こっているのも現実だ。本人だけでなく、その家族も社会から偏見や差別を受けることがある。何も罪を犯していないのに勝手に罪を着せられ、犯罪者扱いにされるというのは、私には想像もつかないほど辛いものだろう。

罪を犯した人達はもちろん、無実の罪に問われた人達にもたくさん苦労があることが分かった。母から祖父の話聞くまでは犯罪者のことを軽蔑していた私であったが、これらのことを知ってからは、犯罪を犯した人達を応援したい気持ちになった。

出所した人達に対して住居や働き口を与えることは必

要だと思うが、それ以上に大切なことは、犯罪者に対する、私たち一人一人の偏見や差別を無くすることだと思う。人間は、周囲からの偏見や差別にさらされると生きづらさを感じ、向上心を削がれるものだ。私は部活動で、自身の技術が未熟であるために、監督に自分の可能性を否定され、酷い言葉をかけられたことがある。その時は、悲しい気持ちになり、努力したいとは思えなくなってしまうた。人から見放され、認められなくなるというのは辛いものだ。ましてや、犯罪者が社会から受ける偏見や差別の目は、一中学生の私を感じる苦痛の比ではないはずだ。

だから、その人が例えばどんなに悪いことをしたとしても、人としての可能性を認めてあげ、見捨てないことが最も重要だと思う。

しかし、もし自分の大切な人が殺されたとしたら、私は、犯罪者のことを許せないと思う。ましてや、可能性を認めるなんて事は出来ないだろう。でも、加害者も人を殺さないといけなくなるまで追い込まれていたのかもしれない……。結局、その時の立場や状況によって、私の考えは大きく変わると思う。

最終的に、人権問題とは、そう簡単に割り切れる問題では無いけれど、私は全ての人間が平等にもっている命の大切さだけは見失わずにいたいと思う。

優秀賞

認め合いたい、「人と違う」自分

日野市立日野第二中学校 二年

渡辺 愛友子

「愛友子さんは他の子と違います。」私が小学一年生のとき、担任の先生が母に言った言葉だ。私は小さいころからコミュニケーションが苦手で、入学後学校で一言も言葉を話さなかつたらしい。それを見ていた担任の先生が、母を学校に呼び出したのだ。

三年生になると、私の担任は別の先生に変わった。その先生は、マイペースで無口な私が真面目に行動していかないと思ひ、いつもいら立っていらしい。「渡辺さん、何で遅いの!」「もつと急ぎなさい!」私が着替えに手間どって集合時間に遅れたり、物をなくして探し回ったりしているとき、先生はよくそう言った。私はクラスにもうまくとけ込めず、話しかけても無視されたり、一人だけ係活動に入れてもらえなかつたりした。母が先生に相談しても、「あの子はそんな子ではないので」と先生は仲間外れにした子の肩を持ち、仲間外れにされる側に

問題がある、という言い様に、母は悲しい思いをしたそうだ。もとから行動が遅く、コミュニケーションも苦手だったが、そのことを周りの人から責められ続けた私は、ますます自分の殻に閉じこもっていった。

私が変わったのは、小学五年生の時だった。二年が経ち、私の担任の先生がまた替わったのだ。「あなたは駄目な子じゃない。頑張れば、きっとできる。」私が失敗したり、落ち込んだりする度に、先生は何度も何度も私をそう励ましてくれた。「あなたは、できる。」そう言ってもらうのは、初めてのことだった。

それからの二年間で、私が気付いたことがある。「人と違う」ことは、必ずしも悪いことではないということだ。運動が苦手だったり、勉強ができなかつたり…。人にはいろいろな欠点がある。しかし、それは責められるべきことではない。完璧な人間は、存在しないからだ。同じように「人と違う」ことも、責めて良いことではないと思う。なぜなら、私たちは「人」だからだ。コミュニケーションが得意で、明るく、友達がたくさんいる人だけが「人」なわけではない。

私は先生のおかげで、自分に自信を持つことができた。しかし世の中には、「人と違う」ことは悪いことだと言われ続け、自分に自信が持てないまま成長していく子どもたちがいるのではないだろうか。私はこのような

ことをなくすために、人と違った「個性」についての理解を広めていくことが大切だと考える。「人と違う」人を見ると、周囲の人は不安になるのかもしれない。しかし、怖いからといってその人を閉め出してしまえば、理解し合うことは決してできない。もし、このような「違い」を「個性」として認め合うことができれば、いじめや仲間外れはなくなるのではないだろうか。私は知り合った人に、「私、話すのが少し苦手なんだ」とあらかじめ伝えるようにしている。コミュニケーションが苦手なことをあらかじめ伝えておくことで、話がうまくできなかったときに相手が不安にならないようにしているのだ。この方法は効果的で、最近は話しかけてくれる人が少し増えてきたように思う。

私は、一人でいるのが好きだ。昼休みには毎日図書館に行つて本を借り、放課後に読書することを楽しみにしている。勉強も嫌いではない。だから私は、集団の一部にはなれなくても充実した毎日を送っている。中学生になり、忘れ物や失くし物をしないための秘策も考え、行動も少しだけ速くなった。しかし問題もある。体育でペアが見つからなかったり、何かが分からずに困った時、話せる相手がいなかったりすることがある。そんな時、もしも私を避けずに助けてくれる人がいたら、毎日をもっと過ごしやすくなると思う。

「あなたは、きっとできる。」私は小学五年生のとき、何度も先生にそう励ましてもらった。今の私の夢は、小学校の先生になることだ。私自身、周りの環境にとけ込まず苦労した経験があるので、もし昔の私のように困っている人を見かけたら、誰よりも先に手を差し伸べられるようになりたい。そして、「人と違う」個性について理解を広め、誰もが過ごしやすい環境を作っていきたい。

また、周りの人達にもお願いしたいことがある。「個性は大切」、頭ではわかっているけど、実行に移すことは簡単ではない。まずは自分の近くに目を向けてほしい。そしてもし、困っているけれど声を上げられずにいる人がいたら、言葉をかけてみてほしい。「人と違う」個性を認め合える、みんなが生きやすい社会をつくるために。



優秀賞

知ることから始めよう

調布市立神代中学校 二年

武居もも

私のいつている教会に視覚に障害のあるKさんご夫婦がこられています。Kさんは、雑貨店の店主でご夫婦でお店をされています。私はKさんとの関わりの中で色々なことに気づき、考えることができました。

「見えなくなっただことは恵みだ」これはKさんがおっしゃっていたことです。一番の恵みというのは、奥さまと出会わせられたことだそう。恵みという言葉聞いたとき、とても驚きました。目が見えなくなることとは、見えていたものが見えなくなり、不便なことだっただけで多くなることでしょうか。それを恵みだと言われたことにびっくりしました。私はKさんのその言葉で、自分が誤った認識をもっていたことに気づきました。私がある言葉に驚いたのは、障害があるということに対して、かわいそうという間違った考えをもっていたからです。障害のあるなしは関係なしに、人にはできないことだっただけ

当然のようにありますし、逆にその人にしかできないことと、その人にしか分からないこともあります。同じ人間なのに、障害のある人はかわいそうで、障害のない人はそうではないという考え方は間違っています。それは障害をもつ人をおかしい人だと決めつけて人に優劣をつけているのと同じことだからです。今まで分かっているつもりだったのですが、恵みという言葉でそのことに気づくことができました。確かに、人を哀れむ気持ちや気遣いはとても大切なものです。しかし、時には、それが相手を傷つけてしまうことになりかねないのだなと思います。

雑貨店をされているご夫婦は、お店の名前を障害のある人もない人も、誰もが必要とされる社会になってほしいという思いで決めたそうです。この、誰もが必要とされる社会という言葉も私の印象に残っている言葉です。その雑貨店では様々な障害をもつ人達が作られた小物やアクセサリーなどの作品が並べられています。店主のKさんはいろいろな人に自分の作ったものを誰かが気に入って買ってくれることの喜びを味わってほしいとおっしゃっていました。これらの視点や店名にこめた思いはKさんが障害をもつ方だからこそ考えやすいことなのではないかなと私は思います。障害のない人はなかなか障害をもつ人の気持ち分かりません。私がそうです。正

直どうやって接したら良いのかも分かりません。しかし、分からないから仕方がないで済ませるのではなく、まずは相手のことを知ろうとすることが大切なのではないでしょうか。相手のこと、思いや考え方を知らなければ、相手の気持ちは分からないと思います。私は、それが障害のある人だけでなく、全ての人と関わる上で大切にしなければいけないこと、そして、誰もが相手を尊重し、必要として、認め合える社会への第一歩だと思いません。

障害のある方に関する課題だけでなく、世の中には様々な人権課題があります。それらを解決するには、まず、私達がそれらの課題を正しく理解することが必要です。人権課題についての理解が広まれば、相手を知ることと同じように、当事者や周りの人を思いやろう、尊重しようという意識が起こり、課題の解決につながっていくと思います。

私はKさんとの関わりの中で得ることのできた気づきや考えを大切にしながら誰もが相手を尊重し、必要として、認め合える社会を実現できるよう、今自分にできることを探していきたいです。



優秀賞

一緒に練習しよう

西東京市立田無第一中学校 二年

尾花友希

「あ、○○ちゃんだ。音楽室に来るなんて珍しいね」と私と同じ音楽部の友人が言った。○○さんは去年の九月頃に転入してきた、同級生の中国人の女の子だ。私がこの人と初めて話したのは今年の三月に開催された校内作品展のとき。一人で作品を見ていると話しかけてくれたのだ。その子はまだ日本語に慣れていないようだった。しかし、身振り手振りで一生涯伝えようとしていた。伝えようとしていることがわかったときなぜだか嬉しくなった。二年生に進学したとき、彼女は特別学級に移動した。日本語に慣れていないためコミュニケーションや授業を受けるのが難しかったからかもしれない。それからその子と会う機会がなくなった。

私と友達は「久しぶり。どうしたの」と声をかけた。どうやら彼女は私たちの部活の様子が気になっているようだ。そしてこの子はカタコトの日本語でこう言った。

「オンガクブニハイリタイ」。

音楽部に興味を持って嬉しかったが、私は少し引かかるものがあった。音楽部は合唱をメインに活動している。彼女は一年生のときより日本語の発音や抑揚の付け方がかなり上達したが、まだ完璧に話せるわけではなかった。音楽部では、歌の話し合いをしたりポイントを聞いてメモしたりするので、皆についていけるか気になった。それに残りあと二ヶ月もしないうちに全国の合唱コンクールの予選がある。今から練習し始めて間に合うだろうか。

隣にいた友人も考え込む仕事をしていた。その後、「とりあえず仮入部から始めようか」と言った。

初めての仮入部の日、とても楽しそうにしていた。私は彼女に楽譜を貸し、今歌っているところを指でなぞった。活動後、その子は私に声を掛けてきた。さつき歌った曲の名前を知りたいらしい。曲名をメモ用紙に書いて渡すと、「ありがとうございます」と何度も言ってくれた。

そして○○さんは先生と色々話し合った結果、音楽部に入部することとなった。コンクールには出ないが練習には参加するそうで私たちも納得できた。話し合いのとき、彼女は意見を活発に出していて感心した。私が心配するほどでもなかったのだ。

パート練習のとき、彼女に楽譜を貸そうとした。すると、彼女はバッグからファイルを取り出し私に見せてきた。なんと紙にはびっしりとこの前歌った歌詞が書かれてあったのだ。きつと家で調べて書き写してきたのだろう。音程も覚えていた。その子の歌うパートはアルトパート。アルトパートはソプラノパートとテノールパートの中間の音域なので音がつられて、覚えるのが難しいはずだ。私もアルトパートだが、家で何度も聞かないと音程をしつかり覚えられず、合わせたときにつられてしまう。私はとても驚いた。皆についていけないようにと私達の見えないところで必死に努力をしていたのだ。

「中国人で日本語を話すのがまだ難しいから」という勝手な偏見で本人が挑戦してみたいことを否定しようとしていた自分を恥じた。日本の歌を外国人が歌えるわけがないと決めつけてしまっていた。ところが自分よりも、もしかしたら音楽部の誰よりも努力をしていたのかもしれない。

その子は結局合唱コンクールに出場することはなかった。今思うと、彼女が遠慮したのだろうか。七月下旬、府中でコンクールが行われた。結果は数年振りの快挙で銅賞。仲間たちと円陣を組んで喜び合った。

しかし、今になってふと思うと、参加できなかつた彼女はどのような気持ちなのだろうか。

夏休み明け、部活動がスタートする。彼女も毎日通ってきてくれるだろう。今度困っていそうだったら私から手を差し伸べるよう心がけたい。

日本と中国は隣同士でありながら、偏見・差別といった大きな壁があるとよく聞く。私も無意識に差別していたことに気づき、はつとさせられた。彼女は私たちと同じ音楽が大好きな普通の中学二年生なのだ。まずは自分ができることから一歩を踏み出したい。そして今度彼女にこう声をかけてあげよう。

「一緒に練習しよう」。



優秀賞

「バリアフリー」な助け合い

西東京市立ひばりが丘中学校 二年

保泉妃那

私は、もっと「助け合いの輪」を広げていきたいと考える。

それは、どんな人でも「人助け」というものは、一歩踏みとどまってしまったり、目を背けてしまったりすることがあると思ったからだ。実際、私もその一人で、つい、そっぽを向いてしまう癖があった。そんな私が「助け合いの輪」を広げていきたいと考えられるようになるには、ある出来事があったおかげだろう。

私がバス停でバスを待っていた時、近くの横断歩道の前から一歩も動かない女性がいた。白い杖を持っていたことから視覚障害を持っていると一目で判断することができた。ここには、「カッコー、カッコー」なんて音を鳴らす信号機はなかったから、歩くための手掛かりがなく立ち止まってしまったのだろう。私はというと、助けられない自分を正当化するのに必死で、声をかけるこ

とも彼女の方に行くこともできなかった。周りも視界に入れないように通りすぎていくようだったから、あの時は、「みんな自分よりひどいから大丈夫。」という変な安心感があった気がする。

そんな中、近くにいた男性が彼女に声をかけたかと思うと、何故だか二人してこちらにやって来た。私があたふたしていると男性が、「すみません。この方ひばりが丘に行きたいらしいので付き添っていただけませんか。」と言ってきたのだ。正直、超超迷惑だと思ったし、なんだか抵抗感があった。私の家は、駅から近いとはいっても疲れきった足で少しでも長い距離を歩くのは嫌で面倒だったし、障害を持つ人に向けた配慮もできるか不安だった。いつも人に手なんか貸せずに母や周りの人に任せてきた私だ。自分が行動しなければならなくなると途端に難しくなる。周りも、迷惑がるような自分には関係ないというような目をしていたから、私がやるしかないと思って「分かりました。」と答えた。

それから二分から三分が過ぎたあたりで、バスがやって来た。きちんとした関わり方も配慮できていたかは分からなかったけど、自分なりに努力して彼女を優先席まで案内した。席は空いていたものの、心配とちよつとした興味が湧いたので彼女のそばに立って、少しの間行動を観察することにした。

少し時間が経って、私も観察に飽きていた頃、「カタカタツ」とパソコンのタイピング音が聞こえてきた。その音を出しているのは彼女で、手元にある小さな機械で一生懸命、文字を打ち込んでいた。それが何をするためものなのか気になって調べてみると、「プレイルメモ」という点字の打てる仕事用の機械だった。そんな光景は、私にとってすごく新鮮で、何より格好良いなと思った。

ようやくバスが駅についた。いろんな嬉しさが重なって、ニッコニコしながらバスを一緒に降りるために声をかけに向かう。自然に私の声のトーンもあがっていたのだろう。彼女も私の声に比例して、声が明るくなっている事に気づいた。それに気づいた私は、不思議と自分から話し出していた。話してみると、「可哀想」なんて言葉も跳ね返してしまったり明るくて素敵な人だった。「困っていたのですごく助かりました。」と笑顔で言ってくれた時は、にんまりしながら、ルンルン気分であった。

今思うと、自分が「健常者」で彼女が「障害者」だと自分から壁をつくってしまったことも、惨めだと思ってしまったことも、随分お門違いだったと感じている。彼女らは私達と分類されがただけれど、「人間」という大きなくくりの中でみてみれば、私達と同じ存在なのだ。

今まで声をかけることができなかつたのも、差別や偏見などの見えない壁、つまり「バリア」が心の中にあつたからだろう。本当のバリアフリーとは個人の意識から始まると思う。だから、環境をいくら変えたって一人ひとりが変わらなかつたら、バリアフリーの社会なんてきつと実現できない。

このような経験から、いろんな人に関心を持つて関わろうとすることは、様々なことを「知る」という点で大事にしなくてはならないと考えるようになった。声をかける時点でああなたの善意はもう届いている。少しでも多くの人のバリアがなくなつていきますように。



優秀賞

ダウン症の兄

あきる野市立西中学校 二年

中村時文

僕は三兄弟の真ん中で次男の時文（トキフミ）です。長男の兄は典広（ノリヒロ）、三男の弟は重文（シゲフミ）、今日は典広の話をしたいと思います。

僕の兄、典広は少し変わっています。例えば月を見て泣き、星を見て微笑みます。感情豊かで典広を見ているとポツと気持ちが悪くなる場合があります。

僕の兄は染色体の二十一番目が通常よりも一本多い三本の状態で生まれてきました。ダウン症候群です。当然ですが僕が生まれた時から家において何の違和感も覚えませんでした。弟の重文が生まれ、僕も大きくなり、兄弟三人で遊んでいるときにダウン症のクセの強さは一緒に過ごしているとよく感じるようになりました。嬉しいことがあると本当に嬉しそうにはしゃいだり、悔しいことがあると拳で自分の膝を叩いたり、他の人が見たらきつと面白い光景かもしれません。でもこれが日常です。し

かし不思議なのですが兄と生活していると気持ちが穏やかになる気がします。僕と弟が喧嘩していても、その横を鼻歌を歌いながらスタスタと通り過ぎる。喧嘩している気持ちはどこかへいき、いつしか僕達も笑っている。そんな日常が繰り返されています。それはダウン症として生まれてきた兄の能力なのかもしれません。

典広が小学生の時、兄の同級生達はすごく可愛がってくれていた気がします。兄は支援学校に通いながら学期に一度の副籍を利用して僕の通った西あきる小学校に通っていました。でも、兄と違う学年の子は、

「あの子誰？」

「変だね。」

と言っていたのを聞いたことがあります。そんな時は悔しい気持ちと、恥ずかしい気持ちと、言葉では表現できない複雑な気持ちになりました。僕自身、「何で僕のお兄ちゃんは普通じゃないの？」「普通のお兄ちゃんだったら勉強教えてくれたのに」と思うこともありました。でも今は、そんな気持ちはどこかへ消えてしまいました。まだ言葉も上手にしゃべれない兄ですが、目には見えないことに、僕らの目を、思考を、向かせてくれる存在だとつくづく実感するのです。

僕らは目に見えることや結果や現状にはかり心を奪われますが、実は目には見えないもの、例えば心が先でそ

の心や思考が結果や現状を作っていると父が教えてくれました。兄を見ていると本当にそうだと思います。

兄の穏やかな心が兄に穏やかな幸せな現実を運んでくると実感できます。兄の存在が家族皆の支えにすぎなくなっているし、今は家族であるダウン症の兄がいてくれて本当に良かったと思っています。兄はどこまでも優しく、人を騙したり、妬んだり、憎んだり、そんな感情とは無縁の人です。大げさかもしれませんが兄の傍にいると生きる意味やなぜ僕らが生まれてきたかなんて考えることもありません。

つまり兄は、家族にとってそういう存在ということです。

きつと知らない間に計り知れないパワーをもらっていたのだなと最近になってすごく思うようになりました。だから、僕も家族もどんな困難も次の大きなハードルも越えられるのだなと思っています。

これからも兄を支え、兄に支えられ、家族仲良く過ごしていきたいと思います。

まだ見ぬ未来がどんなものか解かりませんが、家族と一緒に乗り越えるし、兄について聞かれることがあったら「ダウン症の兄」の魅力を語れるようになりたいです。

典広は僕の自慢のお兄ちゃんです。



優 秀 賞

私が見つけた居場所

羽村市立羽村第一中学校 二年

吉澤 未采

私は、一年生の二学期から最後まで、不登校でした。元々、人の輪に入っていくのが苦手で学校も苦手でした。そのため中学校生活への不安があっただけど、仲の良い友達と同じクラスになれて安心していました。でも、そんなことは関係ありませんでした。ある日その友達につれられてHさんと遊ぶことになり仲良くなることができましたのです。同じクラスということもありたくさん話すようになりました。しかし、ある日HさんとラインLINEをしていて少し揉め事になり、「友達として上手くやれなそう。」と言われました。私は友達が少ないためこんな経験はなく、どうすれば良いか分からず、言い返してしまいました。すると、「私はあなたの友達と仲良くしなかっただけで、あなたとなんか仲良くなるうとしてなかった。」と言われました。失敗したッと思いました。私なんか、いらなかったんだと。それが合図だったのか

もしれません。学校の人も私なんか嫌いだよな、話したくないよな、いやな。そう勝手に想像して、私は暗くなっていきました。次第に、学校自体嫌になりました。朝教室に入ると、人、人、人。苦しくて、夜は何度も過呼吸になりました。ある朝、ついに限界が来て母に泣きながら打ち明けました。「居場所がない、友達もできない、辛い。」その話を終えたとき、母は泣いていました。「辛かったんだね。」と、私を優しく抱きしめてくれました。母は私を責めませんでした。責めるどころか寄り添ってくれたのです。その日から学校を休みがちになりました。そのまま夏休みに入り、元気がないまま過ぎ、九月の定期テストを受けたものの、それから本格的に不登校になりました。習い事も意欲がなくなり、休むようになりました。疲れていたのだと思います。考える生活、居場所を見つけれない生活に。弟妹を小学校に送り出し、昼間をなんとなく過ごしている私に襲いかかるのは罪悪感。学校から解放されても、学校に行けない自分ッがとても嫌でした。「なんで私は行けないんだ。」と体を叩いたり、ひっかかりました。毎日「消えたい」と思いました。空気がなくなって消えてしまいたい。そんな私を見て、母が、「やめて！」と言いました。涙を流しながら、「自分を責めないで。」と言われました。ああ、なんて優しいのだろう。こんな私を受け

止めてくれる。私を一番支えてくれてるのは母なんです。生きづらい世界だと思っていたあの時に、確かに見えた居場所でした。それから母が教育相談室を見つけてきて、カウンセラーさんとお話をする事になりました。初めは緊張していたけれど、ゆっくり優しく話してくれて、本当の安心を感じることができたように思えました。しかし、次に母が、不登校の人が勉強できるフリースクールを勧めてきました。勉強ができるし、登校日にも入れてもらえるし、好条件でした。でも私は同年代の人たちがいるところがまだ怖く、初回の登校を泣きながら終えました。家に帰ると母は残念そうで、悲しんでいるのか、怒っているのか、呆れているのか分からない顔をしました。私はやっと見つけられた居場所を手放したくなくて母と話し合いました。二人とも大声で心の底から言い合っていると、本当に心がスッキリしたのです。そして、ゆっくり進もうと決めることができました。それからスクールも苦ではなくなり、むしろ先生たちに勉強を教えてもらったり、話をするのが楽しくなっていました。一週間に行く回数も増えて、二月の定期テストを学校の多目的室で受けることができました。そのときのテストの結果を見たり、先生達と久しぶりに会ったりして、やっぱり学校で授業を受けたいと思いました。もう一度学校に行きたいと思えたのです。私の誕生日には

友達とご飯に行つて話を聞いて、私も学校の話題をもちたくなりました。四月が近づき、母やスクールの先生、カウンセラーさんと話して「無理しなくてもいいけれど、行きたい気持ちがあるなら応援する。」と言ってもらえました。温かい応援に包まれて、私は、学校に、行きました。

この体験は私にとつて、本当に大切に宝物です。そんな風に思えるようになったのは、私に寄り添ってくれた人々のおかげです。弟妹が「ずるい。」と言わなかったおかげ、父が見守ってくれたおかげ、友達がそつとしておいてくれたおかげ、カウンセラーさんに話を聞いてもらえたおかげ、スクールの人の応援のおかげ、母が真っ先に抱きしめてくれたおかげ。こんなにたくさんの人々が私の世界にいて居場所になっていたのです。人は弱いのです。だからこそ、寄り添ってくれる人がいれば救われる心もあるのです。あの頃の私は自分の居場所の無さに「生きづらさ」を感じていました。でも絶対にあなたの居場所があります。見えていないだけです。いざというとき、あなたに寄り添い、助けてくれる人がいます。きつと、気楽に生きて大丈夫です。

これが、こんな私からのメッセージです。

<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

壁を作らないために

港区立三田中学校 三年

遠藤 壺平

僕はスポーツが好きだ。その中でも、柔道は、僕が一生大事にしていきたい、いわば、僕の生き方の軸としたものだ。

ところで、僕の弟は学童クラブに通っている。そこには僕もたまに遊びに行く。小学生の相手をしてあげるためでもある。そんな中で僕が人権について考えるきっかけがあった。

ある時のドッチボール。盛り上がっている中で、ゲームに入れず、もじもじしている子がいた。黒人の少年である。体も大きく、日本の中でも、ひとときわ目立つ存在であった。そのため、周りからは、「デブ」や「キモイ」などの暴言を吐かれていた。日本語もあまりうまく話せず、一人でいつもレゴブロックをして遊んでいた。いくら言葉が通じなくても、バカにする言葉を浴びせられている現実、十分にわかるだろう。彼はいつもさびしそ

うだった。そこで僕は柔道を通して彼にアプローチしてみた。幸い、その少年の体形は、柔道においてとても恵まれたものであった。僕はその少年を、柔道にスカウトした。僕の弟は双子でその少年と同じ小学三年生である。そして我が家の双子もぼっちゃりしているため互いに、気が合うのか、よく遊ぶようになっていった。そのことから、少年は、柔道を始めたいと言ってくれたのだ。

初めて少年が柔道をする日、僕たち家族は車で、少年を迎えに行った。そのとき少年は、今日を心から楽しみにしていたと伝えてくれたのだ。車の中では、最後列にキツキツになって、弟と座りながら映画を見ていた。初めて少年の笑い声を聞いた。その笑い声は、学童クラブでは、一度も聞かなかった笑い方だった。うちの双子も笑っていた。言葉が通じないはずの双子と少年は言葉を超え、心を許し合い、通じ合っていた。そこに壁などなかった。

道場に着くと、先生方に挨拶して回った。そんな中、先生方皆が口をそろえて「よく来たな。待ってたぞ。」と言ってくれた。その日本語は、おそらく伝わっていない。しかしその思いは、伝わったと思う。彼は安堵したような穏やかな表情だった。

その少年は今、正式に柔道の道場へ入会し、僕の弟た

ちと、日本一を目指し、練習している。そこに差別という壁はなく、皆が一つの目標に向かって高め合っている。これは、柔道の話だけではないと思う。この先の未来、皮膚の色や目の色、産まれた場所なんて関係ない社会になってほしい。いや、そうした明るく優しい社会を僕たち世代が作っていかねければならない。未来は僕たちの思いが作るのだ。

世界中どこでも、これからの時代でも「違い」は必ず存在する。だが、そこで壁を作らないために何ができるか。スポーツ、音楽、アート……。こうしたものの力を信じてみたい。同じジャンルで高みを目指し合い、優れたものを認め合い、互いを尊重したい。そしてそこに、相手の笑顔を引き出せる優しさを忘れないようにしたいと思う。



奨励賞

特別ではない普通の僕

(非公表)

(非公表)

僕は、日本に住んでいる中国人と韓国人のハイフです。他の人からすれば恵まれていると思われるかもしれませんが。また、特別な存在だと言われるかもしれない。ですが、僕は他の人と比べて特別な人間ではありません。確かに周りの日本人と比べると、少し違ったところはあります。小さいころから親の実家の中国や韓国に連れて行ってもらって、外国人の知り合いや親せきも多いです。

僕が保育園の時、周りの友達に自分の国籍や両親の話をしたことがあります。すると急に、周りの子の僕を見る目が、動物園の動物を見るような目になったのを感じました。僕の話聞いていた子たちがほかのクラスの子に話し、お迎えに来たほかの子の親にまで話が広がり、僕のルーツについていろいろ聞かれるようになりました。僕はそれが本当に嫌で、そのあとからは、聞かれ

ても嘘をついてごまかしたりして、自分が韓国人と中国人のハイフであることを隠していました。

小学生になって、僕は家の近くのサッカークラブに通い始めました。そこで、すごく仲のいい友達ができました。そしてその友達にだけ、自分が日本人ではなくハイフであることを打ち明けました。ところが、その次の週の練習の時には、その練習に参加している全員に僕のこと知れわたってしまいました。小学校低学年で、みんなに知識がなかったこともありですが、その時の話の伝わり方は今までで一番ひどくて、僕が北朝鮮の人だと言われるようになりました。そして、日本の近くまでミサイルが飛んでくるのも全部僕のせいだと言われました。とてもショックを受けましたし、信じていた友達に裏切られたような気分になりました。

そのあと、僕は何度も訂正しましたが、嘘だと思われる、誰も話を聞いてくれませんでした。僕は困ってコーチに相談しましたが、その噂を広めた張本人がコーチの息子だったので、「うちの子がそんなことを言うわけないだろう」と言って取り合ってもらえませんでした。そんなこともあり、親に言ってもどうせ信じてもらえないと思い、相談もしませんでした。

それからは、練習に行く気になれず、練習に出かけるふりをして、家から少し離れた公園などで時間をつぶし

ていました。そんなことを半年間していたのですが、ある時、親が忘れ物を届けるためにグラウンドに行ったため、練習に行っていないのがばれてしまいました。その日家に帰ると、親がとても心配してくれていて、僕は初めてサッカークラブであったことを話しました。両親は二人とも真摯に僕の話を聞いてくれました。そして、一緒に練習に行つて、僕が経験したことをコーチに説明してくれました。コーチは初めて僕の話を目撃に聞いてくれ、謝ってくれました。その後で「お前のせいで説教された」とチームの子に言われたのがトラウマになつて、僕の家族は引越つしすることになりました。

そのような経緯で、僕は転校し、東京韓国学校の初等部に入りました。この学校には僕のように日本に住んでいる韓国人やハーフの生徒が多くいます。ですから、自分の国籍のことなども気兼ねなく話せました。もちろん、僕を好奇の目で見る人もいませんでした。

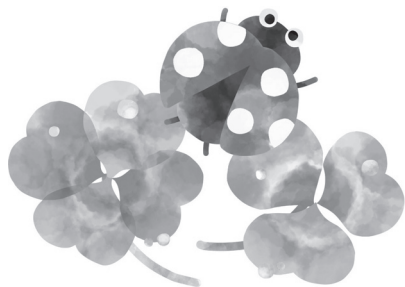
僕のように外国人だからという理由で変な言いがかりをつけられたり、差別を受けている人は必ずいると思います。僕はそのような子供だけでなく、だれでも助けが求められる場所があると思います。

現在、日本でも外国人だけでなく様々な人を尊重しようとする動きがあり、LGBT理解増進法が成立するなど、違いを尊重する社会を作ろうとしています。まだ

まだ生きづらい人たちがたくさんいると思います。僕も困っている人がいたら助けたいですし、逆に僕が差別や偏見を持たないようにしようと思います。

最後に僕が「差別」をテーマに選んだのは、まず、僕の体験を多くの人に知ってもらいたかったからです。そして人権啓発キャッチコピーにあるように、「誰か」のことだけでなく、自分のことのように考えてこの問題に向き合つてほしいと思つたからです。

いつか国の壁を越え、文化の違いを尊重し、誰もが仲良くできる世界が作れるように、みんなと力を合わせていきたいです。



<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

個性を認め合う世界へ

台東区立上野中学校 一年

高尾たかお さくら

ある日突然、目の前が真っ白になった。眩しくて目を開けていられない。私は突然両目が見えなくなつた。歩くのにも父と母の腕をつかまなければ歩くことも出来なかつた。その時、足元で感じた凹凸。点字ブロックだつた。不安が和らいだ。ここを歩けば良いと教えてくれるその凹凸が私を安心させてくれた。

二年半前、私の両目は突然見えなくなり緊急で入院することになりました。最善を尽くしてくださった病院の先生のお陰で今は元通りの生活を送ることができているので、見た目にはわかりませんが、私の左目はほぼ見えていません。私は両目が見えなくなつた時に「見えない世界」がこんなにも怖い世界であることにはじめて気がつきました。毎日歩いた通学路にある点字ブロックも、音の出る信号機も、私には無いものと同じくらいに通りに過ぎていました。しかし、点字ブロックや音の出る信号

機は目の見えない人にとっては生活を安全で快適にしてくれる公共設備です。そして、命を救うほど大切なものになります。だから、点字ブロックの上に立ったり、自転車止めたりすることは絶対にしてはなりません。私は、これらのものが生活の中の至る所に設置され、公共設備が整った日本という国に生まれたことを当時とても感謝しました。

私たちは、普段生活していると当たり前に自由に歩いたり走ったりしています。しかし、目が見えない人や障害がある人にとっては日常が危険にさらされています。例えば、小さな穴や段差、通りすがりの自転車さえも避けるのが難しいのです。最近では電気自動車が増えまして、電気自動車は排気音が無いため静かなので、近くに迫っていることに気がつきにくいのです。私たち健常者でさえ気づかないことがあるくらいなので、目が見えない人たちにとって電気自動車はより怖い存在になっているのではないかと思います。

目が不自由な方はこのような日常の中で生活をしていきますが、私は自分の目が見えなくなるまで「見えない世界」がこんなにも怖い世界だと気づくこともなければ、目の不自由な人について考えることや、どんな配慮をしてあげるのが良いのかなども考えることがありませんでした。自分の目が見えなくなつたことで、見えない人の

気持ちや生きづらさ、あると生活を快適にしてくれる道具や設備などについても考えられるようになりました。

世の中には、障害を負ったことで苦しんでいる人たちがたくさんいますが、身体の障害以外にも「不自由」や「生きづらさ」を感じて苦しんでいる人たちも多くなります。生きづらさを感じているのは、身体に障害を持った人だけではありません。家庭内で圧力をかけられて精神的に苦痛を与えられている人や、肌の色が違うからという理由だけで無下な態度を取られてしまう人、状況判断ができないからと乱暴な態度で介護を受ける老人など目を向けて見ると、たくさん人の苦しんでいる人たちがいます。まずは知ることが大事です。知るために努力することも必要だと思います。なぜなら「不自由」や「生きづらさ」を感じている当事者はそのメッセージを発信することが出来ないからです。

私は両目が見えなくなつた時、両親や祖父、伯母が支えてくれたので気持ち沈まずに、治療に励むことが出来ました。支えてくれる人の存在はとても大きいのです。体に傷が付いたら傷が癒えるまで時間がかかります。ですが適切な処置をすることで、傷の治りが早くなる場合があります。心が傷ついた時も同じように傷が癒えるまでには時間がかかります。しかし、悩みを聞いてくれたり大丈夫だよと言って側で励ましてくれたりする

人がいれば心の傷も早く癒えます。だから、心も身体も元気な私たちが、周りへ目を配り困っている人はいないかと意識をしていくことが大切だと思います。そして声をかけてあげること、救えるきっかけとなるかもしれない。

最後に、私はこれまでの経験を通して、不自由さや生きづらさを発信できない理由の一つは、障害がある人達を「特別」とみたり、思ったりしてしまうことにあると感じました。「特別」とは健常者とは違うという偏見も含まれます。障害を持つことは確かに健常者とは違います。しかし、それを偏見にとらえるのではなく、その人の「個性」ととらえることができるのでしょうか。障害といわれる体の不自由さは、病気やケガだけが原因ではなく、歳をとることで自分の身にも起こる可能性があると思います。自分の身に置き換えることで、障害や不自由さを十分に理解することは難しくないと思います。そして、特別という偏見ではなく、不自由さも個性として受け取り、「してあげる」、「してもらう」という一方通行ではなく、「助け合いながら暮らす」という意識に変えていくことが、健常者として生活する者にとっても、障害のある人にとっても、最初にできる意識改革だと思います。

奨励賞

やさしい祖母

台東区立御徒町台東中学校 三年

嶋 貫 主 博

「高校生になったら使わせてやるからな。今は危ないから。ほら、前に出ちやダメだぞお。」そう言つて雪かき機を操縦する祖父は、祖母と一緒に山形県に住んでいた。山形県は毎年のように大雪が降る。それもあつて毎冬になると僕は、新幹線で遊びにいつていた。そして僕が駅について、迎えに来てくれるのはいつも祖父だった。そんな祖父は、二年前の十一月に癌で亡くなった。その時はコロナで行動をしづらかつたことや、症状が急に悪化してしまつたこともあり、亡くなる直前に会うことができなかった。部活から帰り、その事実を聞かされた時は、何故か涙は出なかつた。翌日すぐに山形の実家に帰り、そこに安置される祖父を見た時、涙が止まらなかつた。

そしてその年の冬も山形は雪でつまれた。僕と父、そして兄は雪かきの手伝いをしに、山形に行った。駅に

は祖母が待つていた。車を運転しながら祖母が言った。「あの人がいなくなつてから、節約、節約よ。一人分の年金しかももらえないから、大変だよ。今まで全部あの人にやつてもらつてたから。雪かきのやり方も分からなくて。」山形の家に着くと、祖父の愛犬二ひきが待つていた。祖父が亡くなつた直後は元気がなかつた彼らは相変わらずの可愛さで僕を出迎えてくれた。

雪かきは想像以上に重労働だつた。父が雪かき機を操縦し、僕と兄が周りの雪をほぐして、雪かき機の前に置く。そうすることで雪かき機が雪を取りこみ、遠くへ飛ばしてくれる。防寒着の中の服は汗でぐつしよりとぬれ、腰も痛くなつた。一晩たつと、屋根に積もつた雪がザザーと大きな音をたてて落ち、家の周りは雪でおおいつくされる。昨日と同じようにまた雪かきである。「わあーきれいになつたねえ。本当にありがとね。」そう言つて祖母は涙ぐみながら笑つていた。年こしは、山形でした。お正月には、お年玉をもらうという文化がある。祖父がいたころは、祖父と祖母それぞれから五千円ずつ、合計一万円もらつていた。そのため、祖父がいない今回のお年玉は半分になるのではないかと思つてみる。お年玉袋をもらい、一人になつた時にそつと開けてみるとお札が一枚出てきた。一万円札だつた。僕は「なんで。節約しないとダメなんじゃないの。犬もいるし一

人なんだから、預金しないとイケないんじゃないの。」
 と思うのと同時に、祖母のやさしさに胸がいつぱい
 なった。

最近、ネットをはじめ色々な所で高齢者のことを「老
 害」と表現しているのを目にする。働いている人が納め
 る税金を使って生活することに對しての、怒りからその
 ように呼ぶらしい。あんなにやさしい祖母のこともその
 ように言われてると感じ、本当に苦しい気持ちになっ
 た。そして、そのようなことを言う人に限って「自分達
 に文句を言ってくる老人に對してだ」とか「うざいか
 ら」などと理由をつけて言っているように感じる。高齢
 者だって昔は私達と同じように若者で、仕事をしてい
 た。だから、今の日本の社会をつくってきたのは、あの
 人たちなのに、そのようなことを言っている。僕たちが
 今こうして生きているのは、学校に通えるのは、毎日
 ゲームで遊べるのは、周りの友達と話せるのは、今、高
 齢者である人たちのおかげなのだ。

僕たちもいづれ、高齢者になる。思うように体が動か
 なくなり、年金によって生活するようになるだろう。そ
 うなった時、若い人たちが助けられたら、心強いに違
 いない。僕たちは高齢者に對して、もっと心を開くよう
 にした方がいいと思う。確かに、年がはなれていて関わ
 りづらいかもしれない。だからといって、侮辱するよう

な呼び方をするのは間違っている。感謝を忘れないこと
 が大切だと思う。

祖母は本当に色々なことを知っている。家庭科の冬休
 みの宿題も、祖母に教えてもらいながら行った。冬休み
 が終わりに近付いたころ、僕は東京へ帰ることになっ
 た。祖母は雪かき機を操縦できないので、あの重労働を
 一人ですると思うととても心配だった。幸い、父が定期
 的に雪かきに行くらしいが、正直心配だ。

僕は来年高校生になる。高校生になると祖母の手助け
 も今より多くのことをできるようになると思う。雪かき
 機の操縦をはじめ、車洗いや、畑を耕したりと力を使う
 ことが多くなると思う。そのようなことにも、しっかりと
 と力になってあげようと思う。また、普段の生活でも、
 困っている高齢者がいたら、助けてあげようと思う。

もうすぐ祖父が旅立って二年になる。「大変だよ。今
 まで全部あの人にやってもらってたから。」あの少し悲
 しげな顔は今でも覚えている。僕は、これから感謝を忘
 れずに行動したい。少しでも祖母の笑顔が増えるよう
 に。

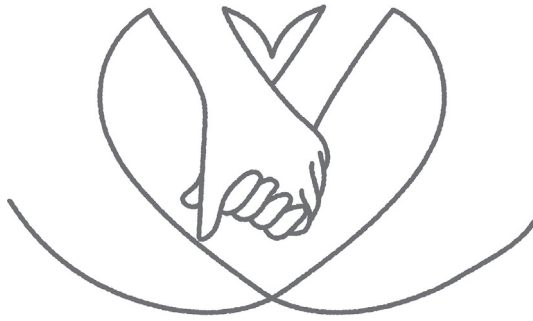
奨励賞

「可哀想」は偏見

渋谷区立鉢山中学校 三年

（非公表）

（非公表）



奨励賞

「家族のかたち」

板橋区立桜川中学校 二年

吉田 希望

私の家には父と母と兄、二ヶ月前から一緒に住んでいる里子の女の子がいます。両親は三年前から里親になるための研修や実習などを受け、準備をしていました。私たち子どもにも里親の働きに取り組もうとしていることを相談してくれて「どう思う？」と聞かれました。びっくりしましたが、家族が増えて楽しいかもしれないと軽く考え、あっさり「いいんじゃない」と答えました。そして二ヶ月前から、里子の女の子との生活が始まりました。

末っ子だった私には、姉妹への憧れがありました。里子ちゃんが来てくれると聞いた時は妹ができるようで何となく嬉しく、不安よりも期待の方が大きいような気持ちでのスタートでした。ですが実際、他人と一緒に生活するということは、思った以上に大変なことだと知りま

例えば食事の好みが合わない、寝る時間が違う、服のセンスも違う、それでいて少し頑固。自分だったらこの場面ではこういう反応するのに、全く期待とは裏腹の反応をする。喜ぶかな、と思ってこちらがやったことに對しても黙って何も言わなかったり、あまりされて気持ちの良くない反応をするので、可愛い、まして妹みたいだと思える機会はとでも少なく、想像していた日々とのギャップに最初は精神的に疲れました。そのように疲れた時、私は部屋に戻っていたのですが、両親はその子のことをずっと気にかけていないといけなかったのです。最初の一ヶ月は側で見えていても、とてもしんどそうでした。

でも一ヶ月が経ち、二ヶ月が過ぎ、ようやくお互いに少し慣れてきて、最近は里子ちゃんも声を出して笑い、私の背中に飛び乗って来たり、甘えてきてくれるようになりました。私も里子ちゃんの何気ない一言に笑ってしまふことも増えてきました。この夏は家族キャンプにも一緒に行きました。テントに泊まるキャンプは初めてのようで、「あと三日でキャンプ」などと指折り数えて楽しみにしてくれていました。スイカ割りもしたことがないというので、どうせならやってみよう、と暗闇の中、テントの横で五人でスイカ割りをしました。虫の苦手な彼女がキャンプの後半では叫びつつも自分で虫を払い除

け、「たくましくなったね」と家族で笑いました。

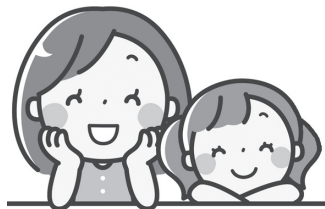
何らかの事情があり、親と一緒に暮らせない子どもは東京都だけで四千人余りもいるそうです。その数は多いようにも思いますが、私には正直ピンとこない数です。その中の八割の子ども達は児童養護施設や乳児院など、施設で生活していて、里親家庭で生活をしているのはい割程だそうです。施設で過ごすことも良い方法だと思いますが、家庭の中で過ごす方がやはりより温かみがあり、完璧ではなくとも一人にじっくりと関わってあげることができるようになります。

すべての子どもは愛され保護されることが必要で、それはその子の「権利」でもあるのだと教えてもらいました。それを自分は当たり前のように受けることができていること、そしてそれを受けることができず、健康と安全が保障されていない子どもたちが、少なくとも東京都だけで四千人以上いるということに、私は軽く混乱するような気持ちを感じました。「社会的養護の必要な子ども」という呼び方も初めて知りました。

私のできることはほとんど無いように思いますが、今、目の前にいる一人の女の子と一緒に生活することが、本当に小さくとも、その子の将来へ向けての土台を作ることになるのなら、嬉しいかもしれないと思います。母は「里親制度はもっと知られると良いと思うけ

ど、やってみて向き不向きもあるね、私はギリギリ」と笑います。

早起きの里子ちゃんは遊びたくて皆を起こしてまわります。朝が弱い母が自分の手を引っ張って起こそうとする里子ちゃんに「まるでマグロの一本釣りだね」と言っているから「マグロ！ 起きて！」と起こします。華奢な里子ちゃんの事を母は「シラス」と呼び、二人で笑い合っています。家族の形としては不自然なのかな、とも思いますが、マグロとシラスと一緒に住むこのような形もなしではないのかなと思います。すべての子どもの笑顔が守られるように、今日も自分のことをしてゆきたいです。



奨 励 賞

知ってもらおうこと、理解してもらおうこと

江東区立深川第七中学校 一年

青柳杏奈

みなさんは助け合いのしるし「ヘルプマーク」を知っていますか。日常生活の中で、赤地に白字で十字マークとハートマークが描かれているヘルプマークを一度は目にしたことがある人も多いのではないのでしょうか。私は、駅に貼られていたポスターを見て、このマークの存在を知りましたが、実際に街を歩いていて、リュックサックなどにこのマークを付けている方に会っても、どんな意味のあるマークなのか。また、どんな方が身に付けているのか、ということがよく分かっていませんでした。ポスターには「思いやりのある行動を」とも書かれていましたが、私にできることは何だろうと考えた時に、まずはヘルプマークについて調べるところから始めてみようと思いました。

ヘルプマークは、外見では障がいや病気の有無が分かりにくいけれど、援助や配慮を必要としている方が、周

囲の人にそのことを知らせることで、援助を得やすくするよう作成されたマークだということ、障がいや疾患の基準があるわけではなく、支援や配慮を必要とするすべての人がヘルプマーク使用の対象となること。例えば義足や人工関節を使っている方、内部障害や精神疾患、知的障害のある方などが考えられること。また、ヘルプマークの普及率も認知度もまだまだ低いという現実を知りました。

ヘルプマークを付けるか、付けないか、それは個人の自由です。付けていれば、わざわざ説明しなくても、配慮や援助を受けやすくなるというメリットや周囲の人たちも思いやりのある行動をすることができます。ヘルプマークを付けていなくても、誰もが、もしかしたら体調が悪いのかな、何か困っていることがあるのかな、などと想像できれば良いのかもしれませんが。しかし、私たちが生活する中では、障がいや困っていることについて知らないために、無意識のうちに誰かの心を傷つけてしまったたり、悲しい思いをさせてしまったりすることも少なからずあります。障がいの有無に関わらず、苦手なこと、理解して欲しいことを周囲の人に知ってもらい、理解してもらおうことで、大きな安心感が生まれ、生活しやすくなります。そう考える理由の一つに、このような経験があります。

私は、吃音という症状が出ることはありません。吃音とは、話す時にどもつたり、特定の言葉が言いにくかったり、話したいのに声が出しづらくなったりする症状のことです。症状は人によって違います。外見では全くわからないので、話をしてみて気づかれることがほとんどです。また、吃音を知っている、という人は少なく、わざとそんな話し方をしているのか、とからかわれたこともあります。そんな時、ヘルプマークのようなものがあつたら良いのに、何度もそう思ったことがあります。周囲の人に、吃音について知って欲しい、理解して欲しい、ありのままの自分を認めて欲しい、そんな思いを抱えながら、小学校の時は、クラス替えの度に手紙を書いてみんなの前で先生に読んでもらったり、自分で説明したりしてきました。今でも音読が苦手、順番が回ってきそうな時は、緊張と不安で押しつぶされそうになります。また、一番困っていることは、自分の名前が言えなくなることです。それは、恥ずかしいからでも緊張しているからでもなく、難発という症状で、話そうとしているのに、のどがぎゅつと締め付けられるような感覚になり、声が出せなくなるのです。学校生活では、名前を言わなければならぬ機会がたくさんあります。でも、そんな時、吃音のことを知ってくれている先生や友達が大きな心の支えとなっています。知ってもらうことで、理

解してもらえなかったことを私は身をもって知ったからこそ、ヘルプマークの意味がよく分かります。

今、ヘルプマークを付けている方も、そうでない方も、誰もがいろいろな場面で誰かに支えてもらいながら生活をしています。配慮や援助をして欲しいことを伝えるのは、少し勇気のいることかもしれませんが。今の私ができること、それは目の前にいる誰かの気持ちや立場に立って行動を考えることです。

人権とは「誰もが生まれながらにして持っている、人間として幸せに生きていくための権利」それが社会全体に広がり、誰もが自分らしく輝ける、そんな未来をみんなで創っていきましょう。



奨励賞

「手を繋いでまわろう」

大島町立第一中学校 三年

木中希音

「人権とは、単に人間であることに基づく普遍的権利である。」

世界には、約80億人を上回るほどの人が住んでいます。その中で、極度の貧困状態で暮らしている人が約8億人。その他にも、生まれつき体の弱い子、生まれつき病気を持つ子。そのような人々がいる中、「人間」とは何なのか、「人間である。」とは何なのでしょう。何をもち「人間」と言うのでしょうか。

二十四時間テレビ「明日のために今日つながろう」は知っているでしょうか。子ども、環境、SDGsなどの問題を発信する番組です。この番組では、さまざまな病気をかかえながらも、ダンスや演奏をします。それを見た時、画面の中にいる子供達、パーソナリティーの人達がとても輝いて見えました。涙がでてきました。こんなにも自分の限界を越えようと努力している子がいるの

に、私は何もしていない同然なのは、言い訳をして逃げていただけではないのか、そう思いました。

耳が不自由な子には、ダンスや音楽に関わるのは難しいのではないかと。そう思う方も少なくないはず。しかし、画面の中の子供達は違いました。目を頼りに覚え、音に合わせて踊っていました。笑顔でとても楽しそうに。負けていけない、そう思いました。難しいことから逃げず、取り組んでいるのはなぜなのでしょう。

苦しみを乗り越えた人にしか見えない景色。それを見てみたい。この子供達は、きっと周りの人に助けられてきたはず。人は一人で生きていけないから、支え合ってきたから、障害の有無に関係なく接し合っている証拠だと感じました。

私達のクラスにも、障害を持つ友達があります。その子供達は、いつも明るく、笑顔なんです。何年もその友達と過ごしていて、はつきり言うのと、一度も可哀想なんて思ったことはありません。その友達は私達と何も変わりません。みんなで過ごす学校生活は、協力し合いの毎日です。車いすで階段や坂道が難しかった時、すかさず助けに行き、そのお礼にお菓子を作ってくれたことがあります。それに、もう一人の友達は、走るのが得意で、見ているだけで元気が湧いてきます。そんな二人と過ごしていると、なぜかクラスがまわらなくなっている様な、そ

んな気がしました。二人のおかげで今のみんながいる。

いつも「ありがとう」を言われる側の私達ですが、私達の方が感謝を伝えたいぐらいです。たがいに助け合い、元気づけ合う。違った性格の一人一人が、相手の足りないところを補ってくれるからこそ、自分がいる。自分でいられる、そう思いました。

一人一人に生きる権利がある。自分と違う特徴を持って生まれた人達が集まる、クラス、町、国、世界。ただ、自分らしく生きられたら、誰かと支え合えた一瞬があれば、人権を持つている「人間」であると言えるのではないのでしょうか。

画面の中で輝いている人。そんな人になりたい、そう思っても私はその人になることはできない。一生なれないのです。クローンでもないかぎり無理ですよね。それがあたりまえなんです。別に、周りに合わせて動かなくていい。一人一人に生まれながらにして固有の他の人に譲り渡すことのできない権利をもっています。その権利、自分は自分である権利を周りに合わせるために手放す必要はないんです。

差別が起こっている現在。なぜ差別が起きているのか。それは、自分と違うものを否定しやすいからだと思います。簡単に考えてみてください。全員違う。あなたが私になれないように、私もあなたになれない。あたり

まえのことではないですか。差別が無くなり、平等に過ごせますように。

障害があっても、自分と違って、相手のこと、自分のことを知っていかなければ支え合いようがない。人は一人では必ずと言っていいほど生きていけません。自分を認め、相手を認めることで、新しい道が開けるのではないのでしょうか。

自分は、ありのままの自分でいればいい。私達のクラスがまるくなれたように、わかち合うだけでいい。もしかすると、本当はそれができているのではないのでしょうか。世界に住む人々は、わかち合うことができるはず。そうしていかないだけ。見方を変えればできるはずです。

地球がまるくなっているのは、みんなが、世界中の人々が助け合い、手を繋げるようにはないのでしょうか。



奨励賞

自分の心を見つめて

立川市立立川第七中学校 二年

木村知暁

今まで三年間やってきたサッカー。

僕は九歳の頃から四年間、ヨーロッパのドイツで生活した。元々は野球をやっていたが、ドイツはサッカー強豪国として有名で、周りみんなサッカーをやっていたので、僕も家から近いクラブチームに加入することにした。

しかし、当然チームメイトはドイツ人の子どもたちで、日本人とは異なる言語を使い、異なる文化を持つ。僕はそんな環境が怖くて、チームで孤立してしまった。

当時は新型コロナウイルスが流行した年だったので、アジア人の僕を見て、コロナを持ち込んだアジア人だとうわさしてるんじゃないか、そうマイナスな方向にばかり考えてしまうようになり、どんどん話しかける勇気を失った。

しかし、ある試合でそんな現状が変わった。その試合

で、僕がパスだと思って蹴ったボールがたまたま相手に当たってゴールになった。その時、みんなが僕に、「Super!」ナイス!と言ってくれた。ただ単純に嬉しかった。それから次第にチームに溶け込んでいき、ドイツ語も少しずつ使えるようになった。

ドイツでの生活も慣れてきた頃、僕はとてもシヨッキンクな場面に遭遇した。僕の三つ下の妹が、妹と同年くらいのドイツ人二人組に、道を歩いていると、「COVID-19!」コロナ!と言われ熱いスープをかけられた。妹は家に帰ってもずっと泣いていた。僕も何が起きたかよく分からず、ただ立っていることしかできなかった。しかし、今になって思う。あの瞬間、目の前で人として許されざる「差別」が起こったのだ。今の僕だったらあの時、妹に慰めの言葉をかけてあげれただろうか、二人組に抗議できただろうか。

コロナによる自粛期間が終わり、久しぶりに友達と会い、都会の方へ遊びに行った。その時、あるデモが起こっていた。いつものデモだろうと思って見てみると、コロナについての大規模なデモだった。そこには中国の国旗が立っていて、その隣にはまるで中国を全面的に批判するような文章が書かれていた。コロナの影響で人々の行動は制限された。そのストレスを、コロナの起源である中国、中国人に向けて発散しようとデモを起こした

のだ。何の罪もない中国人でも、その人の国の印象によつては差別される。その場にいた中国人は何を思ったのだろうか。僕はその事実を知つて、ショックを受けた。そして僕に妹がスープをかけられたあの時のことがよみがえつた。妹は中国人に間違えられたのだ。胸が締め付けられる自分がいた。

僕のこの胸のモヤモヤは限界に達しかけていた。だから、現地の学校に通っている日本人の友達にこの思いをぶつけてみた。彼は普段とてもフレンドリーな性格で、日本語の他に英語とドイツ語が話せるため、多様な国籍を持つ友人がいる。だから彼は、自分の人種に対する差別はないと思つていた。しかし、コロナの影響で彼はアジア人だからという理由で避けられたという。彼は自分が差別されたことに対する怒りよりも先に、差別される原因であるコロナの起源の中国人に不快感を覚えた。その時、彼は自分が一人の人間として恥ずかしいと後悔したと語つた。彼も無自覚に差別をしてしまったのだ。この話を聞いた僕は思った。表では差別はいけないことと思いたい自分があるが、心の中では自分は差別しないと逃げているのではないか。差別は自分の心の中で生まれ、それはいつ生まれるか分からない。自分にも当てはまることだ。そのため、心を常に見つめられる人間でなければ、差別を差別だと見抜けない。その考えを持たな

ければ、世界から差別は消えることはない。

差別はしてはいけないこと。それは世界中の誰もが知つていることだ。しかし差別は世界各地で起きている、それが現状だ。僕たちが差別をなくすために、まずは世界でどんな差別が起きているのかを知ること、そしてすぐに相手はこういう人だという固定観念を持たずに、お互いに認め合い、理解することが大切だ。実際に、SDGsでの取り組みでも、十の目標に、「人や国の不平等をなくそう」がある。その目標を達成するために国連は、女性差別をなくすために女性の地位向上のためのプログラムを支援したり、貧困差別をなくすために極貧層を対象とした資金援助をしたりと様々な取り組みを行っている。僕は差別をなくすために、ドイツでの体験をいろいろな人に話して、世界の差別を知ってもらおうと思う。いつか差別がなくなつて、みんなが平等に生きられる世界になつていつて欲しい。

奨励賞

「人権」が教えてくれる大切なこと

東大和市立第二中学校 二年

栢か下した琴こと海み

私は、人権問題に興味がある。これまでの人生で色々なニュースを見てきたが、理不尽に罪なき者が傷ついたり殺されてしまう世の中であることに腹が立った。

七年前の二〇一六年七月二十六日、神奈川県相模原市にある障害者施設「津久井やまゆり園」で殺人事件が起きた。入居者の十九名を殺害、職員二人を含む二十六名が重軽傷を負った。逮捕された植松聖容疑者は犯行動機について「意思疎通を取れない人間は安楽死させるべきだ」などと自説を展開し、「障害者は社会の負担である」という考えが殺人事件へと至った。

この話を知って私は、自分勝手に理不尽な事件に腹が立った。なぜ、罪のない人間を殺すのか。ただ今を生きているだけなのになぜ苦しまなければいけないのか。なぜ、他人の痛みを苦しみを自分の頭で考えられないのか。とても不思議に思った。

私が小学四年生の頃、いじめをしていた。今考えるとこれは立派な人権侵害だ。当時はちよとした遊び心から始まったものだった。私を含む三人とある女の子の悪口の手紙で一人一個ずつ書き続けていた。「ブス」「バカ」「デブ」「髪の毛くるくる」など、沢山の悪口を書き続けた。ある日、その事が担任の先生に見つかり、とてもひどく怒られた。その事は母親にも連絡がいき、家に帰ってからも長時間にわたり怒られた。怒られてからは気付いたのだった。取り返しのつかないことをしてしまったのだと。私はいじめてしまった子に泣きながら謝った。謝っても謝っても許されないと思った。嫌われてしまうこと、一生恨まれることを覚悟した上で謝り続けた。

しかし、その子からの返答は違った。

「もう大丈夫だよ。これからは仲良くしてね。」

私はとても苦しかった。とても酷いことをしたのに、許せないぐらいのことをしてしまったのにその子は私を許してくれた。私は自分自身が醜くて仕方がなかった。

未だに思う。なぜあの時、後先を考えずにいじめをしてしまったのか。なぜ「私はやらない」とたった一言が言えなかったのか。あれから沢山のことを学び命の大切さ、いじめの怖さなどについてどんな事なのかよく分かった。いじめはたった一言で人を殺してしまうもの。

もしかしたらあの時いじめてしまった子を、自分が発したたつた一言で殺してしまつていたかもしれない、人の人生を壊していたかもしれない、そう考えただけでとても怖く手が震える。それぐらい恐ろしいものなんだと気付いた。

当時のことを振り返って、私はもう二度と人権侵害をするようなことは絶対にしないと心の中で誓つた。たとえ嫌いな人が居ようとその人のいい所を見つけていい所を好きになればいいんじゃないかって。昔、いじめをしていたことは決して許されない。自分自身もいじめを行つたことを許さない。この思いは永遠に背負つていくだろう。過去は変えられないのだから。しかし、未来はこれからいくらだつて変えられる。だから私はこの思いを胸に一人一人を尊重できる未来を生きたい。

障害を持つていたつて少し人と違うからつてその人が嫌いだからつて関係ない。たつた一人の人間ということには変わりはないのだから。一人一人今を懸命に生きている。それが、当たり前になり、忘れてしまつていくだけなのだ。本当はとても大変で大切なことなのだ。今を生きていくことは奇跡なのだ。この一分一秒はこの命はお金では変えられないとても大切な宝物なのだ。たつた一度だけの人生なのだ。こんなにも大切なことを忘れないで欲しい。こんなにも大事なものを無闇矢鱈に無差別に

勝手に終わらせないで欲しい。誰にだつて有り得ることだ。知らないうちに加害者になつてしまふかもしれない。いつどこで誰がどうなるかなんて誰にも分からない。ただ、生きているこの一瞬がとても尊く、美しく、そして幸せなのだ。

私は現在中学生で、世の中に「人権」について発信できるような手段は少ない。けれど、この人権作文を通して「人権」というのは一生付いてくるとも大切で大変な問題であることを知つた。また、実際の事件に触れたり、過去を振り返り「人権を侵害する」というのはどれだけ恐ろしく怖いものなのかということを改めて知ることが出来た。この人権作文を通して「人権」とは何なのか、どんな役割でどれだけ大切なのかを知り、自分の考えや思いを深めることが出来た。今回考えたことを大人になつても決して忘れずに一人一人を尊重できる、人権を大切にできる、そんな大人に私はなりたい。

奨 励 賞

ふつうの家族

武蔵村山市立第一中学校 二年

鈴^{すず}木^き 椛^か 乃^の

私の両親は耳が聞こえない。いわゆる聾者だ。しかし、その事を恥ずかしいと思った事も憎んだ事もない。それが「ふつう」だと思っていたから。

それが「ふつう」じゃないと気づいたのは小学二年生の授業参観の時。クラスメイトの子が「お母さんだ。お母さん」「あ、いた。」この一瞬の、他の人からしたら何気ない会話のように思えるかもしれない、この会話に凄く衝撃を受けた。これが「ふつう」なのか。すごく羨ましいと思った。それと同時にすこし悲しくなった。これから、あんな事は出来ないんだ。みんながしている事が私には出来ないんだ、と。

それから自分に自信が持てなくなつた。何をしていても、私なんか、私には出来ないと考え癖が付いてしまった。だから何事にも挑戦出来なくなっていた。授業で手を挙げる事も、友達と外で遊ぶ事も「私には出来な

い」と思っていて、学校が終わった後はずっと家でゲームなど、一人でできる遊びをひたすらやっていた。一人だから、やっぱり楽しくなかった。

そんな時に、母が手話サークルに連れていってくれた。そこで二回目の衝撃を受けた。しかし一回目とは全く違う感情だった。私が存在している意味がこの時はっきりと分かった。

そこでは、耳が聞こえる人。聴者と聾者が手話を学びながら笑顔で話している様子だった。今まで、聴者と聾者は真逆の分かりあえない人たちだと思っていた物が一気にひっくり返された気持ちだった。とてもうれしかった。私でも大丈夫だと思えるようになった。

私はそこから何度も手話サークルに行った。私は手話のできたので、習うという訳じゃなかったけど、すごく行きたかった。そこにいと大丈夫だと思えるから。何度も行って、聴者の人と手話で話してみたりした。「すごいね、手話できるんだ。」と言われると私の唯一無二の長所のように感じられた。

そうして、自分に自信がついた。私は長所があるんだ。と思えるようになった。授業で手を挙げて発表できたし、友達と外でたくさんあそぶようになった。今思えば、母は私の気持ちに気付いていたのかもしれない。そう思うと感謝の気持ちばかりだ。

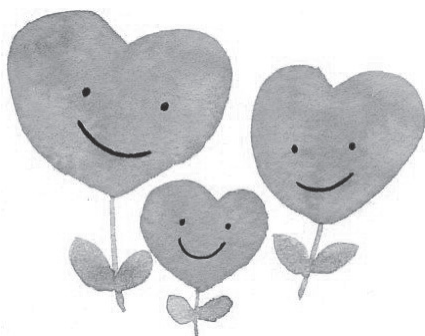
私がかげをして病院に行く事になった時、初めて通訳という仕事がある事を知った。今までは私がしていて、それが仕事になるなんて思ってもいなかった。そして病院で、医者の方の言う事と患者の方の言う事をテキパキと通訳している所がすごくかっこよく見えた。すごく憧れた。そういう人の生活の手助けが出来るのはすごく良い仕事だと思った。そして、私の将来の夢となった。

こんなに私にぴったりの仕事があるのかと思いき、通訳について調べた。通訳は手話だけでなく、外国の方との話の時にも呼べる事を知った。また、資格が必要な事を知った。こんなに大変なんだと思い知らされた。しかしどうしてもなりたかった。人を助けたいし、自分のような考え方になってしまおう人をすこしでも減らしたかった。だから今、私は手話通訳士を目指して頑張っている。

私は、みんなと違う家族が恥ずかしかった。「ふつう」の事が出来なかったし、みんなと話をする事も出来なかった。そんな事で怒って家族に八つ当たりする事もあった。けど、手話サークルに行ってから、私の考えが変わり自分の家族がとても誇らしくなった。この家族の所に生まれてきて良かったと思えるようになった。手話が出来ると自分も肯定できるようになれた。

私は、この手話サークル・家族・仕事に出会えて人生

が大きく変わったと思っっている。みんなからしたら「ふつう」じゃないかもしれないし、可哀想と思うかもしれないけど、私はこの家族に生まれて良かった。と胸を張って言いたい。



<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

私が私らしく生きていくために

武蔵村山市立小中一貫校大南学園第四中学校 三年

丸^{まる}山^{やま}蒼^{あお}葉^は

「自分が、自分の人権を尊重すること」。これも、人の人権を尊重するための一つの方法だと私は思う。そのように思い始めたのは、中学二年生になって何回目かの学年集会がきっかけだった。

私は中学生になり、小学校が同じで仲が良かったほとんどの子と学校が別れてしまった。クラス、学年のほとんどが知らない子ばかりで、自分から話しかけるのが苦手な私はなかなか馴染めなかった。小学校の時は、皆思いやりのある友達ばかりで、それが当たり前だと思っていた。けれど、中学生になるといくつかの小学校から進学するため、クラスには、太っていたら人権がないと話している人がいたり、勉強ができないと馬鹿にされたり、容姿や得意不得意で人を評価する人が多々いた。それはおかしいと分かっていたけれど、でも私は嫌われたくなくて、なるべく自分が良く見えるようにしていた。

周りがどう思うかを気にして、周りの友達に合わせてばかりだった。段々と目を重ねるにつれて、気の合う友達も出てきたけれど、それでもまだ自分の気持ちを伝えられないことがよくあった。そんな、自信がなくて、周りの目ばかり気にしている自分が嫌で悩んでいた時、私に勇気を与えてくれた人がいた。それは、同じ小学校から進学した友達だった。

中学二年生のある日、総合で進路学習として調べた高校について、代表者が発表するために学年集会が開かれた。その代表者の中に彼女はいた。彼女の順番になり、話が始まった途端、まるで彼女の世界に入り込んだような気分になった。百何人が集まる前で話していても、彼女の振る舞いは変わらなかったからだ。中学生になって様々な人と関わる中でも、小学校からの彼女らしさが変わらず残っていた。少し話し方に癖があって、でもそれが面白くて、私はそれが彼女の良さだと思っていた。一部では、その話し方を馬鹿にして笑っている人もいたけれど、そんなことを気にせず、堂々と自分の伝えたいことを伝え、そしてそれを楽しんでる彼女はかっこよかった。そして、私も彼女のように自信をもって自分から私らしく生きていけるようにしたいと思った。

中学生になってからずっと、私は自分を偽ってきた。本当に自分がやりたいことは違うのに、友達と同じこと

を選んでしまったり、自分の好きなことも友達にどう思われるかが怖くて話せなかつたりすることが多かった。友達に嫌われて一人になるのが怖かったから、本当の自分を隠して、都合の良い自分を作っていたのかもしれない。でも、自分の気持ちを隠してばかりで、本当は何がしたいのかも分からなくなりそうだった。そんな時に、彼女の堂々とした姿や誰にでも変わらない振る舞いが、自分らしく生きることの大切さを教えてくれた。何かができるから良くて、何かができないから良くないということではなく、どんなところでも自分の気持ちを大切に、行動できることが大事だということだ。自分を馬鹿にする人がいても、必ず自分を認めてくれる人がいる。全員に好かれようとして自分を見失うより、ありのままの自分で自分を認めてくれる人を探す方が私は楽しいと気付いた。だから、その時から私は、私が私らしく生きていくために、自分の気持ちを信じて素直になり、またマイナスな面にも向き合って上手く付き合っていくと決めた。

それから、自分にも少し自信がつき、前より沢山の人と話す機会が増えた中で、自分だけでなく家族や友達などの自分以外の人の人権についても考えられるようになってきた。自分自身のことを否定していた時があったことで自分を否定された時のつらさが分かったからだ。

私は皆が自分らしく生きていけるようにしたいと思った。だから、まずは自分と同じように相手の容姿や得意不得意、好きなことなどを否定しないよう心がけた。人それぞれに得意なことや苦手なこと、好きなことがあるから面白いんだ。今までも、思い出せば一人一人が違うから、それぞれに良さがあったって、お互いに助け合えたり、新しい発見があったりした。だから、お互いの良さを認め合うことで、生まれながらもつそれぞれの大切な個性を尊重していきたい。そして、それが当たり前に行ける世の中になりたい。私は、まず自分の人権を大切にすることで自分以外の人の人権についても考えることができたが、世界中の人にそれぞれの方法で人権の守り方や他者との関わり方を見つけてほしい。そうすることで、人と人とのつながりを大切にできる世界を創ってきたい。



奨励賞

第一歩

日野市立七生中学校 三年

塚本 エミリー

相手がどんな表情をしていても顔に表れている表情が本心を映し出しているとは限らない。こんな考えが度々私の頭の中をよぎる。この考えを初めて感じたのは小学校一年生のときだ。

私は、日本生まれ日本育ちの日本とヨーロッパにあるモルドバという国のハーフだ。モルドバ人である母の血が濃いのか私の容姿は、昔からずっと幼い頃の母にとってもよく似ていた。私は小学校に入学するまでは自分の容姿が周りの子供たちと異なっているということを少しも考えたことがなかった。だからみんなと普通に学校へ行き、普通に授業を受けるのがとても楽しみだった。しかし小学校に入学し、ある程度みんなと仲良くなるとその子たちはだいたい同じような質問を私に問いかけるようになった。

「エミリーちゃんってみんなと感じが違うよね。どこの

国の人なの？」

私は初めてこの質問を受けたとき、あまり深く考えず純粹に私のことをもっと知ってもらい、より仲良くしたいという思いで笑顔で

「モルドバっていう国のハーフなんだよ。」

と答えた。だけどこの質問に答えていくうちに、たくさんの子が私がハーフであることを知っていた。すると中には、私のことを名前ではなくモルドバと呼ぶ子も出てきた。また、私が進んだ輪に入ろうとしたとき、

「モルドバ人、日本語分かってるの。」

「モルドバは俺らと違うから向こう行け。」

など私が日本人であることを無視し、笑いながら私をかからう子も少なくなかった。私はそのモルドバ人という言葉によつてみんなと私との間に大きな壁をつくられているかのような気持ちになった。私は、みんなと同じ日本人で、普通の人々と変わらない小学生なのに、なぜ私を省くような言い方をするんだろうと怒りと悲しみで胸が苦しかった。だけど自分の気持ちを正直に話せばよい私のことを省いたりひどいからかい方をしてくるのではないかと怖くて、私は悲しい気持ちになっても精いっぱい明るい表情をつくり、自分の気持ちをこまかした。しかし私の考えは逆効果だったようで何を言っても私が笑って受け流すことをいい事に、投げつけるように更に

きつい言葉を放つ友達が増えてしまった。入学したての頃はあれほど楽しみにしていた学校も一年生の終わり頃には行きたくないと強く感じるようになり、私は何度も両親に学校を休みたいと頼もうとした。だけど休みたいと言えばきつと私の両親にひどく心配をかけてしまうと思いい、両親にさえも自分の気持ちを正直に言えず、学校のことを聞かれてもまたしても笑ってごまかすようになった。自分の気持ちを誰にも言うことができないまま私は小学校二年生になった。学年が上がり、また新しい友達が何人もできたが、二年生になってからはどんな子からあの質問を受けても

「ヨーロッパの方の国のハーフだよ。」

と答えるだけで具体的な国の名前は言わないようになってきた。しかし、新たにできた友達の中に私がどのような一年生の生活を送っていたかを知っている子がいた。その子は普通の日本人の女の子だったが幼稚園のときに上手く周囲になじめず私と同じような経験をしたりした。その友達は、私がこれ以上辛い思いをしないよう私の話を真剣に聞き入れ、時にはアドバイスをくれる優しい子だった。その子のアドバイスを聞くうちに私自身も少しずつ本当の笑顔を取り戻し、徐々に周囲にもなじみ始め、二年生の夏休み前には私のことをモルドバと呼ぶ人は一人もいなかった。私は肩の荷がおりたようで信じら

れないほど気分が明るくなり、ほっとしたのをはつきりと覚えている。あのときアドバイスをくれた友達には今でも心から感謝している。

私はこのような経験から世界中に強く伝えたい思いがある。どんなに幼い子供や年老いた老人であってもこの世界の全ての人に、容姿や使う言語が違っていても、その人は自分と何一つ変わらない人間であることをよく理解してほしい。あなたと同じように、一人一人に親が一生懸命つけてくれた立派な名前がある。一人一人に喜びや悲しみなど様々な思いがある。私はこれらも人権の一つであると思う。そんな人権をからかい半分、面白半分で奪ってほしくない。たとえ相手の顔が笑っていても心が笑っているとは限らない。心は自分以外には誰にも分らない。だからその分、相手の事をよく理解し、考えて行動することが大切だと私は思う。相手の立場を理解し、行動することで、その人の人権を守る一歩となり、その一歩が周囲へ広がり、みんながその人を大切に思い、その人はみんなのことを大切に思う、そんな社会が創られていくのだと私は考えている。

そんな世界を実現する一歩をまず私が踏み出そうと思う。相手を理解し、考えて行動することで人権を守り、一人一人が互いを大切に思う世界を実現するための第一歩を。

奨励賞

「知ろうとする」ことの大切さ

町田市立南大谷中学校 一年

蓬田 怜

みなさんは、車椅子に乗った人と関わったことがありますか？

私が小学三年生の時、クラスに車椅子の転校生がやってきました。最初は仲良くなれるかなとドキドキして不安でしたが、その女の子は笑うと笑顔がすてきで、クラスメイトはたくさん話しかけていました。そのころの自分は、「車椅子に乗った人は障害者で、気を使ってあげなければならぬ人」だと勝手に偏見を持っていました。でも、みんなと楽しそうに話す車椅子の友達を見ているうちに偏見を抱いていることが馬鹿馬鹿しく思えてきて、その女の子と仲良くなりたい、という気持ちに変まりました。またその女の子は、クラスメイトの誕生日に手紙を書いて渡してくれました。筆跡は少し震えていたけれど、下書きされた鉛筆のあとが真剣に書いたと物語っていて、とてもあたたかい気持ちになったことを覚

えています。私にとっては、「みんなと違う」ということが「かわいそう」なことだとその時は思っていました。でも、今は、それも立派な偏見だし、相手を知ろうともせず自分から遠ざけていたんだと気づきました。

「かわいそう」という言葉は、とらえ方を変えると呪いの言葉でもあると思います。辞書で調べてみると「他人のつらさに同情する様子」と書かれていました。でもそのつらさを他人が勝手に「かわいそう」と一言で表すのは、ただの自己満足のためなのではと私は思います。「大丈夫?」、そう言って手を差しのべたり、まずは相手のことを知ろうとする姿勢が私だったらされてうれしいし、「かわいそう」よりきつと何倍もいいことなのではないかなと気づきました。

そんな呪いの言葉を減らすためにも、まずは自分から歩み寄ることが一番大切なんだと思います。でも私は臆病で、困っというような人などに声をかけることができませんでした。

ある時、そんな私を変えてくれる出来事が起こりました。家族で遠くまで出かけた日の帰り道、大粒の雨がふっていました。周りの人や自分達は傘をさしているのに、道に傘をさしていない車椅子の方がいました。道を通りすぎる人達は見えていないはずなのに、見て見ぬふりをして通りすぎていました。私もひどいとは思っていた

けれど、勇気を出して話しかけることができませんでした。困っていることは一目瞭然なのに誰も手を差し伸べない様子を見てみると、その男性の存在を無視して否定している気がして、でも私は話しかけられなくて、悲しくて悔しくなりました。

そう思っていたら、父がその車椅子の男性に「大丈夫ですか？」と声をかけました。するとその男性は悲しそうに、寂しそうに、こう言いました。「車椅子をこぎながら傘をさせないんです」と。たしかにその車椅子は自動じゃなかったし、周りに雨やどりできそうな所もなさそうだったので、本当に大変そうでした。また、その男性は私たちと同じ駅に向かっていたので、私に車椅子を押させてくれました。実際に押してみると思ったより重くて、毎日こいでいるその男性はすごいなと思いました。横断歩道の、私達にとってはほんのわずかな段差でも、車椅子だと通るたびにガタガタゆれて、父や母に「もう少し丁寧！」と注意されたことも何度かありました。でもその男性は「気にしないで」という目線や言葉を送ってくれて、なんで自分は話しかけることを躊躇したのかと、恥ずかしくなりました。

駅にはたたくさんのバリアフリーの工夫があります。例えばエレベーター。鏡がついているのは、車椅子の人の乗り降りのしやすさのためだそうです。他にもボタンが

低い位置にも一箇所あるのは、車椅子の人が押しやすいためだそうです。また、インターネットで調べると、このボタンは通常のボタンより扉の開放時間が長くなるようで、降りるときに時間がかかるかもしれない車椅子の人に向けての思いやりなんだろうな、と思いました。きつとこのような装置を作るということは、車椅子に乗っている人達のことを知ろうとすることから始まっているのではないかと思いました。

先ほどの車椅子の男性と向かった駅で一番大変そうだったのは、電車に乗る時です。私達にとってはたった数センチのすきまですが、車椅子の場合はスロープを使わないと乗ることができませんでした。このようなことから、最近ではホームと電車の段差を縮める動きが進んでいるそうです。

私は、「かわいそう」だと思わず、「知ろうとすること」が一番大切だと思います。何も知らずに「かわいそう」と言うのは絶対に違うと思うし、そうすることで、誰かの「困った」が解決するかもしれません。それが、みんなが平等に、楽しく暮らしていくための第一歩なんだと、私は思います。

奨励賞

ひめゆりの塔で考えたこと

稲城市立稲城第四中学校 二年

玉城 茉央

先日ロシアのウクライナ侵攻についてニュースで取り上げているのを見た。私はそれについて、これと言って特別な感情は抱いていなかったの、「大変そうだな」程度にしか思っていなかった。しかし、そんな私の考えを変える出来事があった。

この夏休み中、私は父の実家がある沖縄県に帰省した。その時、母から、沖縄戦の慰霊碑である「ひめゆりの塔」へ行くことを提案され、行ってみることにした。ひめゆりの塔というのは沖縄県にある記念碑で、第二次世界大戦中にひめゆり学徒隊と呼ばれる女学生たちが従軍させられ、多くの犠牲者を出したことを伝えるため、また、亡くなってしまったひめゆり学徒隊の鎮魂のために建てられた碑である。平和記念資料館の中には、戦争に巻き込まれた女学生たちの集合写真が大きく貼られていた。また、彼女たちの中で生き残った数名の方々の実

体験も語られていた。ひめゆり学徒隊である彼女たちの役目は、負傷した兵士の看護や治療の手伝いなどのため、寝る間も惜しんで働くことだった。そんな中、当然ながら、勉強することや、友達と遊ぶことなどの学生として与えられるべき権利が与えられていないことも分かった。これは、戦争が人権問題と密接に関わっていることを表す一例である。

塔の周りに、亡くなった学生たちの名前が刻まれた石碑が並んでいた。彼女たちが無力な立場から戦争に巻き込まれ、まだ若い命を落としたことに胸が締めつけられるような気持ちになった。戦争の悲劇を知ること、平和の大切さを改めて実感することができた。私たちは戦争のない平和な社会を築くために努力しなければならぬと思った。ひめゆりの塔で見たことは、忘れずに心に刻みたいと思う。戦争がもたらす悲劇を心に刻み、人々の命を大切にしたいと思った。また、平和を願う気持ちを忘れずに、日々過ごしていきたいと思う。

現在、ロシアとウクライナとの間で戦争が続いている。この戦争では、非常に多くの人々が命を失い、家族や友人と別れることを余儀なくされている。さらに、この戦争では先述のひめゆりの塔と同様に、多くの人々の基本的人権が侵害されている。戦争によって生活が脅かされ、人々は安全で平和に暮らす権利を奪われているの

だ。特に子供たちは、教育を受ける権利を奪われ、学校に通えなかったり、児童労働に従事したり、さらには命の危険にさらされたりすることもある。このような事例から、戦争が人権問題を引き起こし、多くの人々の生活に大きな影響を与えることは明らかである。それから私の考えも変わり、国同士が争い、多くの犠牲を出すくらいなら、戦争なんてしなれば良いのと思うようになった。また、戦争は自分には関係無いわけではないと思うようになった。

私たち日本は、戦争の悲惨さについて身をもって経験し、平和な時代を築いてきた。だからこそ、戦争のない平和な世界を願うべきだと考える。

そこで、何故戦争が起こるのかが気になった私は、インターネットで調べてみた。戦争が起こる主な理由として、民族、宗教、資源、政治、領土の争いの五つがあることを知った。それら全ては、人々の考え方の違いや、一人や少数人数が何かを独占しようとすることによって起きるのだと考える。

戦争を防ぐためには、対話や協力が大切だと感じた。人権は、全ての人に対して平等に保護されなければならない。他国の文化や価値観を尊重し、平和的な方法で問題を解決する努力をしなければならぬと改めて思う。だからこそ、対話や仲裁、交渉の手法を学び、戦争を防

ぐ取り組みを支援することが求められる。平和への道は簡単ではないが、選択肢を探し、努力を続けることが大切である。

私たち中学生は命の尊さや人権の大切さを学び、未来に向けて何が活かせるかを考えるべきだと思う。戦争がない社会を築くために、些細なことでも行動に移すことも重要になるだろう。私たちの未来は明るく、平和なものであつてほしい。

これから大人になっていく私たちは、歴史が示す過去の過ちから学び、世界平和なんて大きなことは望めないかもしれないが、少なくとも自分の関わることができる範囲で精一杯自分の意見を表現し続けるような存在でありたい。そして、自分自身はもちろん、周りの人のそのかけがえのない生活や幸せに生きる人権を守ることができるとなりたいと思った。



奨励賞

あたたかい社会をつくりたい
(偏見で生まれる心の冷たさ)

府中市立府中第二中学校 三年

徳原 ゆり

豚肉が食べられなくてしかめっ面の子。それが彼に対する私の中の印象だった。

中学2年生の最初、私はタジキスタンから来たばかりの子と隣の席になった。日本語に慣れていないので、授業は少しも分かっていない様子だった。最初は仲良くになりたいと話しかけたが、返事もそっけなくて自分の中で勝手に少しづつ避けてしまっていた。しかし今では、目が合うと手を振りあい、一緒に帰ったり、一緒に勉強することもある。それは、私の中の誤解が少しづつ氷のようには解け、打ち解け合えたからだ。彼に対する印象は、努力家で優しく家族思いな子に変わっていた。

私は委員会です仕事があるので朝早く学校に行っていました。朝早く行っていると、私服の彼を見かけることがしばしばあった。一緒に学校に行ってる子に彼について聞

くと、

「朝いつも妹を小学校に送っているんだって。」

と返ってきた。私は驚き、歩きながら時がゆつくりになったように感じた。勝手に彼の印象を決めていたからだ。また、私の家の隣に、子ども食堂とカフェを同時に開いているフリースクールがある。私はいつもそこで勉強したり、オーナーさんに誘われて外国の方と交流したり、オンラインでイギリスの茶道配信の授業を手伝ったりしたことがある。私はそこで彼をみかけた。何度かみかけるたびに彼は熱心に男の人に日本語を教わっていた。私をみつけた彼が話しかけてくれて、ノートにびっしり練習した漢字がみえた。彼とは、「チエブラーシカ」というお互いに好きなキャラクターや、バスケットボール部のことなど、共通な話題も増え、いつの間にか仲良くなっていた。二年生の最後、「ありがとう」をテーマにした作文が宿題として出された。春休みそのフリースクールで彼に会った際、日本語の作文は難しいと少し困ったように笑いながら言っていた。その後、

「作文は、〇〇先生(一・二年生のとときの担任の先生)やゆりにしてもらったことを書こうかな。」

と言っていた。うれしさで心があたたかくなった。一年間で彼は本当に日本語が上達し、委員会などにも取りくむようになっていた。私の彼に対する印象もがらりと変

わっていた。その後は、「チエブラーシカ」の新しい映画について話しながら帰った。

中学三年生の夏休みに、私はそのオーナーさんに彼が受けていた学習支援について尋ねた。するとペンと紙をもってこの店の開店までの経緯も含めて教えてくれた。もともと介護施設と学習の場を提供していた女の人がそこで貧困・障害を抱える子に勉強を教えていたそうだった。しかしコロナウイルスによりその場が失われてしまった。その時にオーナーさんがこの店を開き、支援を行っていた女の人に場所を貸して再開できたそうだった。さらに、外国人の子にも学習支援を行っているということだった。話の中で、夏休み中に体重が減る子どもがいることを知った私は驚いた。そして、オーナーさんや女の人のお話を聞いて、笑顔を見ながら、学習支援に対する勝手なイメージを持っていた自分の存在にも気づかされた。この後は規模を拡大するより地域に根づいた一人一人の居場所を作りたいと語るオーナーさんを見ながら、また無知な私の心を氷をとかしてくる人が現われたと感じた。その際オーナーさんにお誘いしてもらい、次の日、日本に留学しているシリアの方が来るとのことだったので、お話を聞きに行った。土地を追われた人々が、逃げた国の負担と考えられていることを、なくしていく研究をしている方である。その方とのお話の中で、

シリアでは戦争中なので子どもたちの教育の場が失われていること、特に家族を殺された子が学校より戦場に行きたがっているというものがあつた。私は胸が冷たくなったように感じ、いかに自分が幸せなのかを考えさせられた。お話をしている中で気づいたことは、「難民」「難民問題」という言葉がいかにマイナスなイメージを持つかということだ。人々の希望さえ奪ってしまうと思う。やはり大切なのはあたたかさだと感じる。冷たい海を渡って来た人にあたたかい視線を向け、あたたかく受け入れたい。土地を追われた人々に対して、難民キャンプで作られたぬいぐるみを買うという支援を行ったことがある。そのぬいぐるみを買った本編集者さんとお会いした際に「人のあたたかさを信じよう」という言葉をいただいた。私は思う、人のあたたかさで世界は変われると。偏見から、人は心に冷たさをもって相手を見てしまう。そのことを実感したからこそ、人の心の冷たさを、溶かせる人間になりたい、溶かしあう社会をつくりたいと思えた。人のあたたかさは差別をなくし、平和を生めると信じている。そんなことを考えながらシリアの方に別れを告げ、帰ろうとしたときには、出してもらったジュースの氷はすっかり溶けていた。

奨励賞

起立性調節障害が気づかせてくれたこと

府中市立府中第七中学校 三年

黒島愛子

皆さんは、起立性調節障害という病気を知っているだろうか。最近ではメディアでも取り上げられ、耳にする機会が増えてきている。しかし少し前までは、どんな病気かはもちろん、その病名すら知っている人は少なかった。実際私も、自分がこの病気になるまでは全く知らなかった。

起立性調節障害、通称ODとは自律神経の働きが低下し、起立時に身体や脳への血流が悪くなる病気だ。思春期に多くみられ、中学生の十人に一人がかかっていると言われるほど起こりやすい。症状は朝なかなか起きることができない、全身倦怠感、頭痛、立ちくらみなどがあがり、人によって重症度は異なる。

私がこの病気と診断されたのは小学三年生の時だった。夏休みの中盤から原因不明の高熱が十日間程続いた。初めのうちは、疲れがたまり身体が弱っているだけ

だと思っていたが、熱が下がった後も体調は良くならず、一ヶ月近く寝たきりの日々を送っていた。そこで治りが遅いことを疑問に思った主治医の先生が調べ、起立性調節障害だと診断された。初めてその病名を聞いたときはどんな病気なのかも全く知らず戸惑った。けれど説明を聞いているうちに、当てはまる症状がいくつもあり納得した。朝の倦怠感、めまい、吐き気。今まで貧血だと思っていた症状も、そのひとつだとわかった。

その後一年間は学校に行けたり行けなかったりという日が続き、身体的にも精神的にも辛かった。このままずっと治らないのかもしれないと不安に押しつぶされそうな日もあった。そんなとき家族は、

「絶対に治るから大丈夫だよ。焦らずゆっくり治そう。」と私の心に寄り添ってくれた。

私は病気を理由に自分だけ特別扱いされるのが嫌だったし、こわかった。だから自分から、私はこういう病気なんだと言うことはなかった。当時の担任の先生も、そんな私の思いを汲み、みんなと同じように接してくれた。幸い、学校の友達も私の病気に理解を示し、支えてくれた。私が少しずつ学校に通えるようになると、友達は何気ない顔で、

「おはよう。久しぶりに会えて嬉しいな。」と声を掛けてくれた。最初は、いじめられるかもしれないな

いと不安だったが、その言葉を聞いて嬉しかったし、安心した。具合が悪く、学校に通えなかった日は「早く元気になってね。」「明日は来れるといいね。待っているよ。」などと、手紙を書いて励ましてくれた。そんなみんなの優しい言葉が、何よりも支えになった。

一方、少数ではあるが、起立性調節障害は怠けや甘えだと言う人もいる。本人が抱える病状や苦しみをあまり知らずに「学校では元気そうに見えるのに。」「ただサボりたいだけだ。どうせ仮病だろう。」などと冷たい言葉を口にする。そんな言葉を聞くと、なりたくてなったわけではないけれど、自分が悪いのではと思うこともあった。病気だからといって特別扱いをしてほしいわけではないが、ただ知ってほしい。起立性調節障害は怠けや甘えではなく、病気であるということ。そして、自分たちが発する冷たい言葉によって傷ついてしまう人がいる、ということを理解してほしい。

今、私は薬を服用しながら元気に学校生活を送っている。それは私のことを理解し、支えてくれたみんなのおかげだと思う。しかし世の中には、起立性調節障害に関わらず、人種や文化などさまざまなことで他の人に理解されずに苦しんでいる人たちがたくさんいる。

「誰もが安心して生活できる世界をつくる」そのためにはまず「知る」ということが大切だと思う。自分と違

う人に偏見を持ったり差別をしたりせずに、その人のことをよく知る。そうすることで誤解がなくなり、お互いのことを理解し支え合えると思う。これは決して簡単なことではない。だが一人ひとりが少しずつ変わっていくことで、やがて世界は変われると思う。

私は起立性調節障害になり、多くのことを知り、経験した。人に理解されない苦しみ、人の優しさ、健康であることの幸せ。暗い面だけでなく明るい面についても気づくことができた。そして何より、今まで当たり前だと思っていたことも当たり前ではなく、幸せの一つであるということに気づかされた。起立性調節障害にならなければ気づかなかったことも多いと思う。その学んだことを生かし、次は私自身が、これまでもらってきた優しさを返していきたい。



<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

「他人ごとからじぶんごとへ」

小金井市立小金井第二中学校 二年

森 永 琴 美

私はヘルプマークを持っています。ヘルプマークは、障害や難病の人、妊娠初期など、外見からわからなくても、救助を求めている人が、救助を得やすくなるように、東京都が作成したマークです。私がヘルプマークを持っている理由は、助けが必要だった時に声をあげられなかった経験があるからです。

私は小学三年生頃からこだわりが強くなり、些細な事を気にして落ち込むことがよくありました。ひどい時は、お風呂から上がる際、足の指と指の間をずっと洗い続けないと気が済まない症状に悩まされていました。

自分も両親も「流石におかしい」と思い、児童精神科を受診しました。検査の結果は「自閉症スペクトラムの疑い」でした。最初は聞いたことない名前だったので、特に何とも思いませんでした。しかし、高学年になり、インターネットで調べると、自分の説明文かのように、

自分と全く同じ症状が書かれていました。更に調べていくうちに「自分は普通じゃないのか」と不安が襲ってきました。

その後の小学校生活では、自分は空気が読めないため、なるべく出しっぱった発言を控えるように心がけました。

小学校も卒業かという時期に、三重県から東京都への引越しが決まりました。新しいスタートだと本当に楽しみでした。入学式ではすぐに友達ができ、学年委員になるなど、充実した日々を送っていました。

二期期に入り、また楽しい毎日が始まりました。しかし、学年委員の仕事が増えていき、みんなからのプレッシャーも凄く、時々ミスをしてしまいました。その度に泣き、落ち込んで、「自分は何故こんなにもできない人間なのか」とネガティブな気持ちが強くなっていきました。

限界が来たのか、いつも通り部活終わりに友達と帰宅していると、突然、みんなが自分の悪口を言っているかのように聞こえ始め、地面にうずくまってしまいました。少しすると、通りかかったおばさんが「大丈夫？」と声をかけてくださり、家で休ませてくれました。いつの間にか寝てしまい、目が覚めると母がとても心配した顔で目の前に立っていました。外には車で待っている父

と姉がおり、怒ることもなく「おかえり」と言ってくれました。家に帰るといつも通りに夕食を用意し、ゆつくり話を聞いてくれたのが何よりうれしかったです。

次の日、いつも通り学校に行こうとしたところ、昨日のことを思い出して、また倒れるかもと怖くなり、学校に行きませんでした。明日からは行けると思いましたが、次の日も気分が悪くなって行けませんでした。その次の日も、また次の日も行けず、不登校となりました。

三学期も学校に行こうと努力し、登校したものの、早退し、気づいたら学校に行かず、ゲーム漬けの生活となりました。そんな中でも、学校のみんなから来るメールに励まされていました。

二年生の夏休みになり、私が「勉強がみんなに追いつけない」と悩んでいたところ、家族が「勉強は自分のペースでいいよ」と言ってくれました。そのおかげで、急にやる気がでてきて、宿題や趣味のサックスをやるようになりました。それが自信に繋がりが、「学校に行きたい」という気持ちが大きくなっていききました。

私の場合、家族が障害について理解があったため、こーうやってたくさんさんの困難を乗り越えてくれました。しかし、世の中には病院に行かせてくれない、自分の子供を障害だと認めない親もいるそうです。なので、私のことを助けてくれたおばさんのように、家族以外でもみんな

が障害について理解し、寄り添ってくれればと思います。

例えば、電車やバスでヘルプマークを付けている人に席を譲るなど、身近に始められることがたくさんあると思います。

最近では、ヘルプマークや障害のことをきちんと理解していないのにもかわわず、「おまえ障害だろう」などと簡単に言う人がいます。発達障害だけかもしれないが、障害は短所ではなく、個性であって、初対面の人にも覚えてもらいやすいという長所だと思っています。発達障害は、ちよつと人よりできないことが多いくらいで、悪いことはありません。

人それぞれ、できること、できないことがあって当たり前。「お前、そこで逆立ちしてみろよ」と言われて、できない人もいます。その時、できない人を責めるのは絶対に間違っています。できない人は、できないなりに練習し、頑張っているのです。

あなたが「おまえ発達障害なの？やば」と言うとしたら、じゃあ、あなたは家族や親戚・自分の子供が発達障害だったら同じことが言えますか？

<p style="text-align: center;">奨 励 賞</p>
--

支えとなるもの

三鷹市立第二中学校 二年

嶋田有り佐

「そんなところに立ったら邪魔じゃないか。」
「すみません。」

私が友達とエスカレーターに乗っていると後ろからそんな言葉が聞こえてきた。恐らく退勤中だったのだろう。急いでいる様子だった。

私には左手、左足を失った友達がいる。小学三年生までは両手両足を使っていたが、冬の寒い日通学中に車にはねられ大怪我を負い左手、左足を失った。私はその事故の日、友達と「一緒に学校に行こう」と約束していたのだが、寝坊してしまい先に行ってもらおうようにしたのだった。しかし、私が学校に着いてもその友達はまだ教室にはいなかった。授業中も気がかりで、担任の先生に聞きに行ったところその日は欠席とのことだった。体調不良にでもなったのかと思ひ、その後は普通に授業を受けた。

だが、友達は一週間経っても学校に来ることはなかった。流石に心配になり、私の母を通じて休んでいる訳を聞いてもらった。返ってきた言葉は「娘が片手、片足を失いました」だけだったという。入院先の病院を教えてもらい、お花とお菓子を持って急いで向かった。病室に入ると左手、左足がなくギクシヤクした笑顔でいる友達の姿があり複雑な気持ちになった。クラスメイトも心配しているから言わなくて良いのかと聞くと「周りの人に心配かけたくないから言わないでほしい。」と言われた。私にも心配させたくないから無理に笑顔でいてくれていると悟りまだたくさん話したかったが、病院を去った。自分自身でさえ今は不安や悲しみ、心の整理でいっぱい。いっばいだろうに、私に気を遣ってはしくなかつたから。友達が心の整理がつかまでは距離を置くようにすると心に誓った。たとえ嬉しいことがあって喜びを分かち合いたくなくても。

私がお見舞に行ってから三ヶ月が経とうとしている時、校門で立ち止まってなかなか校舎に入る様子のない、ランドセルを右肩に背負い義足をつけている友達の姿があった。少しでも元気づけようと以前まで友達と話しては笑っていたエピソードを言うように笑ってくれた。私は嬉しくなると同時に安どした。教室に着くとクラスメイトが心配した様子で集まってきた。それが嬉しかった

たのかは分からないが友達は泣いていた。私は友達を守りたいという気持ちが一層強くなった。

友達が徐々にまた私に気を許してくれるようになり、2人で遊園地に行く約束をした。友達に「私は障がい者だから乗れないものもたくさんあると思うからごめんね。」と言われていて、かばんにヘルプマークがついているのも見て正直少し不安だった。しかし、遊園地のスタッフさんが優しく案内してくださり私も友達も楽しむことができた。それなのに帰りの駅のエスカレーターで障がい者は一部のみに邪魔者扱いされているのだと実感する出来事があった。

帰りが遅くなり退勤時間とかぶってしまい駅には疲れた様子の大人がたくさんいた。階段にはのぼる人とくだる人で混雑しており、エレベーターもたくさんいる人が乗ってきてどちらも危険だったので、ホームにはエスカレーターを使用して行った。東京では左が立ち止まる人で右が歩く人という文化が染みついている。しかし、友達はまだ義足には不慣れだったため何かにつかまらないうとバランスがとれない。普段は私が肩を貸し支えたり車いすを使ったりしているが、エスカレーターばかりは手すりにつかまらないうとバランスを崩してしまう。だから私は友達を右側の手すりに誘導した。確かに東京では立ち止まる人は左側だから邪魔になつてしまうかもしれない

いとも思ったが体の不自由な友達の安全を配りよするとこの方法しか思いつかなかった。だが、後ろから急いだ様子のサラリーマンがのぼってきて私たちに「そんなところにいると邪魔に決まっているだろう」と怒鳴られ謝ることしかできなかった。私はすぐにでも退けるが、友達はそういかない。後ろを見るとそのサラリーマン以外のはのぼって来ない様子だったので謝りながら私は友達に肩を貸し、ゆっくりではあるがホームまでのぼりきった。サラリーマンは舌打ちしてその場を去っていった。友達はうつむいて励ますことができず、気まずい雰囲気だった時、一人の女性が私たちに「ああいう人たちにも障がい者の大変さを理解している世の中になればいいよね」と話しかけてきた。その女性にはヘルプマークがついていた。私たちはこの言葉に随分救われた気がした。このことから障がい者のことを日本中の人に理解してもらい、決して『障がい者だから』とは言わずに障がいを持つている方も、私たちも同じ立場であるべきだと改めて強く感じた。

だから、友達なりのペースや考えを支える義足には私になりたい。

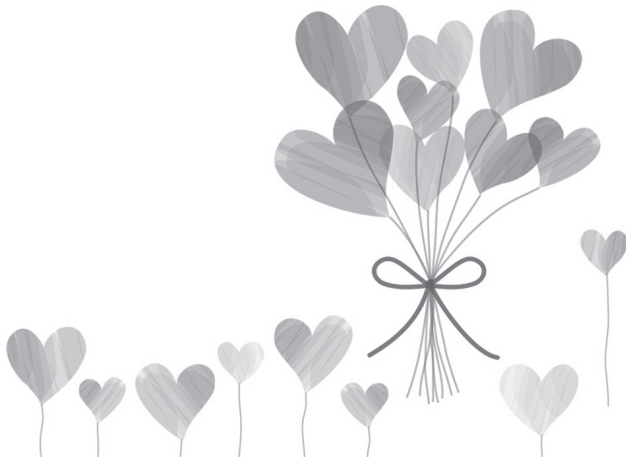
奨励賞

私の活動から見つかった「生徒の権利」

晃華学園中学校 三年

勝間田 夏希

（非公表）



奨励賞

何気ない一言を意識して

白梅学園清修中学校 一年

養父 さくら

みなさんは多汗症を知っていますか？ どの様なイメージを持っていますか？ 多汗症とは手や足、脇など局所的に、多量の発汗がある病気です。私は多汗症の中でも、手のひらに日常生活で支障が出るほど汗をかく手掌多汗症です。手掌多汗症は、原因がハッキリしていませんが、日本の人口の約5%もいるそうです。つまり、二十人に一人の割合で症状が現れているということです。

日常にどのような影響がでるかという点、紙が濡れて文字が書けなくなる、物を落としやすい、などです。症状の重さや汗をかく量は個人差があります。私の場合、落ち着いている時は集中して物事に取り組むことができますが、酷い時は汗が気になって集中できず、気になることでさらに汗をかいてしまう、悪循環がおこります。

「何だ、そんなことか。」と思うかもしれません。です

が、その小さな不便が重なり、大きなストレスとなつていきます。

私が一番気を遣うことは、手を触れることです。なぜなら、小学校の時に言われたある言葉が記憶に残っているからです。

「手を触りたくない。」

そう言われたことがあります。それを言った友達は、傷つけようと思つて言つたわけではないと思います。思つたことをついパツと口に出してしまっただけかもしれません。でも、当時の私はその言葉でとても傷つき、落ち込んでしまいました。みんなとは違うと突き付けられたような気がしたからです。本当に些細な違いなのに。そのモヤモヤはなかなか晴れませんでした。

手掌多汗症を自覚してから漠然と不思議に思つていたことがありました。それは、同じことで悩んでいる人を見たことがない、ということでした。私は家族に同じ症状を持つ人がいますが、学校では聞いたことがありませんでした。私の学年は百人以上いたので、約五人ほど同じ症状で悩む子がいたはずですが。

今考えるとやはり、誰にもいえず隠している人が多かったのではないかと思います。わざわざ相談する必要もない、と私も考えていました。あるいは、病気だとは思つていなかったかもしれません。人口の約5%という

高い割合の中で、実際に医療機関にかかる人は一割以下という調査結果もでているそうです。実際「暑い時とか、緊張している時の汗くらい普通なんじゃないの？」と私もよく言われていました。その程度じゃない…と理解されづらいことを痛感していました。

それから数年して、手掌多汗症を友達に打ち明ける機会がありました。不安な気持ちが大きかったです。あまり深刻な雰囲気にならないように、でも、ちゃんと分かってほしいと思ったので、しっかり伝えました。

「別に気にならないよ。」
 すごく自然に言われ、驚きましたが、同時に心が温かくなりました。

私は今まで周りに「分かってもらおう」ことにこだわらずにいたのではないか。もちろん、理解してくれた上でフォローしてくれるのも優しさだと思うし、とても嬉しかったです。でも、全員に分かってもらうことは難しいです。「どうせ、分かってもらえない」と塞ぐよりは「分かってもらえないこともある！」と考え、そこから上手く付き合っていくことが大切なのではないか、と思いました。

以前言われた「手を触りたくない。」という「何気ない一言」は何年も心に残る深い傷をつけました。でも、「別に気にならないよ。」という「何気ない一言」は私の

心を温かい気持ちでいっぱいにしてくれました。そして新しい考え方をするきっかけも与えてくれました。たった一言で、その短い言葉で、相手を傷つけることも、幸せにすることもできる。それに気付きました。

これらの経験を通して、たとえ自分に悪気がないとしても人を傷つけてしまっている可能性があると思う良い機会となりました。だから、私は軽いノリで相手の身体的な特徴や性格を指摘するのは、絶対にやめようと思います。どんなに仲が良くても、何を言ってもいいわけではない。そのような意識が当たり前の世の中になってほしいです。そのために、まずは自分から心がけていこうと思います。私一人にできることは小さくても、周りの人も、その周りの人も一緒に。そうやって思いやりの輪を繋いでいきたいと強く思いました。



奨励賞

片腕の剣士

日本体育大学桜華中学校 一年

柳川美海

私は六人家族の末っ子です。両親と姉が二人、兄が一人、そして私の四人姉兄です。私の家族は祖父も含め全員が剣道という競技にたずさわっていて、剣道一家だね、と言われてきました。そんな私は、生まれたての頃は赤ちゃん用の小さなカゴに入り、本当に小さな頃から、姉や兄たちの剣道の応援で全国各地のいろいろな場所について行っていたと両親より聞いています。家族の会話の中でも剣道の話が多い我が家ですが、その中でも私の心の中でしょげきを受けた話がありました。片腕の剣士です。

それはまだ私が三才頃の話です。兄の剣道の全国大会で日本武道館に行った時のことです。全国各地から強いチームがたくさん集まっており、兄のチームの一回戦の相手は北海道から来たチームでした。兄にとっては初めての全国大会。対戦相手がどんなメンバーなのかを試合

を見て研究しようとしていたそうです。すると、広い日本武道館の中で、遠くから見ても何か様子が違うということにチームメイト全員が驚いたそうです。なんと兄の対戦する相手には片腕がなかったのです。

「右腕がない」と聞いた時、私は「剣道出来るの？」とまず思い、しだいにさまざまなことが頭の中を駆けめぐっていきました。剣道は竹刀を左手で持つて右手をそえて持つのですが、添えて持つ手がないなど、私自身、今まで考えもしてませんでした。両手があつてこそ剣道ができるという事が当たり前だと思つていた私は、言葉を失いました。しかし、その剣士の試合は片腕がないことを感じさせないほど、闘志あふれる試合をしていたのを当時の試合のビデオを見て感じました。そして、片腕がないからやらない、出来ないという考えを少しでも持つてしまった私自身の考えを深く反省しました。ないから出来ないのではなく、なくても出来るということを彼の剣道が証明していました。

生まれながらにしてから五体満足な私。今までケガといえは遊んでいた時に頭をぶつけてしまい、少し縫った記憶があるくらいです。それ以外は大きな病気をすることもなく、毎日元気に過ごしています。これは普通なように、普通なことなのではないのだと強く思います。普通なことこそが奇跡なのではないかと言えるのではない

でしょうか。

腕がないから剣道が出来ないという考え。これこそ改めなければならぬと思います。スポーツをやっているとケガをすることも多いです。しかし、ケガをしているから何もしないのではなく、ケガをしていても、ケガに関係ない部分を使って、今、自分に出来ることを全力でやる。この考えと、片腕の剣士が剣道と向き合っている姿には、近いものがあるのではないかと私は考えます。

しかし、片腕の彼が剣道をやるにあたり、どうしても助けをもらわなければ出来ない部分もあります。それは、面紐、同紐を結ぶときです。しかし、その問題については、チームメイトや先生の助けによって改善される問題ではないかと思えます。片腕がないことにより、出来ない、あきらめるのではなく、ほんの少しの手助けにより、彼は他のチームメイトと同じように剣道に向き合います。試合に出る喜びを味わう事ができるのです。

人間は無限の可能性をもって生まれてくるのだと私は思います。一人一人、みんな生きる意味を持ってこの世に存在しているのだと思います。彼にはたまたま片腕がなかったけれど、大勢の観客の中で立派に試合をしていました。人と違うということを恐れる人が多いこの世の中において、彼や、彼のことをサポートして試合場に送

り出してくれている全ての人は本当に素晴らしいと思います。

人間は一人一人みんな違う個性を持って生まれてきています。その違った個性に触れて、人は人としてどんな成長をしていけるのだと思います。私は、兄の試合のビデオの中で片腕の剣士と出会い、両親から話を聞き、人と違った方がいい。むしろ、人と違うのは当たり前なのだということを学びました。人と違うところについて、この世の中には、完ぺきな人間なんかいないのだから、一人一人がお互いの存在を尊重し合うことが必要なのだと思います。仮に足りない部分があったとするならば、みんな支え合い、その足りないところを補いながら生きていけばいいのだと思います。

生きていること、そして、当たり前前の日常を送ることが出来ている奇跡に感謝しながら、これからも一日一日を大切に生きていこうと強く思います。

奨励賞

身近な平等

瑞穂町立瑞穂中学校 三年

齋藤 早和子

「人権」とは、「人の権利」と書いて表します。個人の権利は全て守られるべきであり、侵害されてはなりません。また、全ての人が等しい立場であるべきであり、という意味の「平等権」も守られるべきであり、侵害されてはなりません。私は、身近な「平等」には少し勇気がいるのではないかと思っています。

突然ですが、皆さんは公共交通機関を利用したときに、人に席を譲れますか？

私は去年の九月、校外学習で上野と浅草に行った際に、電車を利用しました。電車は満員で、人と人との距離がとても密な状況でした。私は満員電車に慣れていなくて、ずっと長い時間立ちっぱなしだったということもあり、早く目的地に着いてほしいという気持ちでいっぱいでした。足の疲れに耐えるためにも、友達と優先席を譲り合いながらみんなで乗っていました。私達が電車に

乗ってしばらくしたあと、一人の女性が乗ってきました。なぜその女性のことを覚えていたからですか。私は身近にヘルプマークをつけていたからです。私は身近にヘルプマークを持つ人がいないので、そのとき初めてちゃんとヘルプマークを見ました。私は疲れていて余裕がなく、「ヘルプマークだ。初めて見たな。」としか考えが回らず、次の瞬間には別のことを考え始めていました。しかし、ヘルプマークに気付いた一人の友達は、私たちが互いに譲り合っていた優先席に、その女性を「どうぞ。」と誘導したのです。私はそのとき、はっとしました。なぜその女性がヘルプマークをつけているのか、その意味を理解していなかったのです。ヘルプマークをつけているということは、周囲に援助を求めているということなのに、それを大した感情もなく流してしまいました。今になって、とても後悔しています。そして同時に、ヘルプマークに気付き、女性を優先席に誘導した、勇気と行動力のあるその友達を尊敬しました。こういったことに気付ける視野の広さと優しさ、そして実行力がなければ、優先席に誘導することは容易じゃなかったと思います。このことがあり、私は、優先席に誘導できるような、また、まったく面識のないような人への気遣いの心をもてるような人になりたいと強く感じました。

人権作文を書くにあたってこのことを思い出したとき

に、身近な「平等」には少しの勇気が必要なのではないか、と思いました。困っている人に手を差し伸べるのは、少し勇気が必要です。思い出してみれば、過去にご高齢の男性が物を落としたときにそれを拾い、男性に渡すと、「自分でやる。」と言って怒られたことがあります。そのときからなにか自分の中で、「下手に首をつっこまない方がいいのかもしれない。」という気持ちが生えて、行動が消極的になってしまったのだと思います。

しかし、友達の行動を機に、自分の考えを改めようと決めました。同級生ができていることを私はしない、というのは考えられません。身近な「平等」に必要な少しの勇気をもてばよいのです。「平等」とは、全ての人が同じ高さに立つことだと、私は考えています。それを叶えるための少しの勇気をもち、自分の考える「平等」に近づけていきたい、叶えたいです。そのためなら、私のできる全てに力を尽くしたいです。

最後に、私は、互いが互いの人権を侵害せず、気遣いし合える、そんな社会になってほしいと考えています。また、全ての人が平等に扱われる社会になってほしいと考えています。そのために、新たな一歩を踏み出し、小さなことでも自らの力をもって行動したいと思います。



令和五年度 全国中学生人権作文コンテスト 東京都大会入賞作品

◆最優秀賞（東京法務局長賞）

おばあちゃんのお笑い

墨田区立両国中学校

二年（非公表）

◆最優秀賞（東京都人権擁護委員連合会会長賞）

太陽への願い

東久留米市立大門中学校

三年 若林友惟

◆最優秀賞（東京新聞賞）

違いを認め合う心

渋谷区立笹塚中学校

一年 豊山由紗

◆特別優秀賞（東京都教育委員会賞）

自分の心に正直に

国分寺市立第四中学校

二年 成川心晴

◆優秀賞

最高の薬とは

豊島区立西池袋中学校

三年 坂田裕奈

障害の大小に関わらず

神津島村立神津中学校

三年 松江つむぎ

犯罪者に関する人権問題

昭島市立拝島中学校

二年 古川はな

認め合いたい、「人と違う」自分

日野市立日野第二中学校

二年 渡辺愛友子

知ることから始めよう

調布市立神代中学校

二年 武居もも

一緒に練習しよう

西東京市立田無第一中学校

二年 尾花友希

「バリアフリー」な助け合い

西東京市立ひばりが丘中学校

二年 保泉妃那

ダウン症の兄

あきる野市立西中学校

二年 中村時文

私が見つけた居場所

羽村市立羽村第一中学校

二年 吉澤未采

◆奨励賞

壁を作らないために

特別ではない普通の僕

個性を認め合う世界へ

やさしい祖母

「可哀想」は偏見

家族のかたち

知ってもらふこと、理解してもらふこと

「手を繋いでまろくなろう」

自分の心を見つめて

「人権」が教えてくれる大切なこと

ふつうの家族

私が私らしく生きていくために

第一歩

「知ろうとする」ことの大切さ

ひめゆりの塔で考えたこと

あたたかい社会をつくりたい（偏見で生まれる心の冷たさ）

起立性調節障害が気づかせてくれたこと

他人ごとからじぶんごとへ

支えとなるもの

私の活動から見つかった、「生徒の権利」

何気ない一言を意識して

片腕の剣士

身近な平等

港区立三田中学校

(非公表)

台東区立上野中学校

台東区立御徒町台東中学校

渋谷区立鉢山中学校

板橋区立桜川中学校

江東区立深川第七中学校

大島町立第一中学校

立川市立立川第七中学校

東大和市立第二中学校

武蔵村山市立第一中学校

武蔵村山市立小中一貫校大南学園第四中学校

日野市立七生中学校

町田市立南大谷中学校

稲城市立稲城第四中学校

府中市立府中第二中学校

府中市立府中第七中学校

小金井市立小金井第二中学校

三鷹市立第二中学校

晃華学園中学校

白梅学園清修中学校

日本体育大学桜華中学校

瑞穂町立瑞穂中学校

三年 遠藤 壱平

(非公表)

一年 高尾 さくら

三年 嶋 貫 主博

三年 (非公表)

二年 吉田 希望

一年 青柳 杏奈

三年 木中 希音

二年 木村 知暁

二年 栢下 琴海

二年 鈴木 柊乃

三年 丸山 蒼葉

三年 塚本 エミリー

一年 蓬田 怜

二年 玉城 茉央

三年 徳原 ゆり

三年 黒島 愛子

二年 森永 琴美

二年 嶋田 有佐

三年 勝間田 夏希

一年 養父 さくら

一年 柳川 美海

三年 齋藤 早和子

◆ 作文委員会賞

誰一人置き去りにしない社会

千代田区立九段中等教育学校
二つの大切なこと 中央区立佃中学校
どこまでが差別？人権とは何か？ 中央区立佃中学校
南の空へ飛び立った星々 中央区立日本橋中学校

誹謗中傷による人権侵害 新宿区立落合中学校
外国人の人権 学習院女子中等科(新宿区)
差別される「障がい者」 台東区立柏葉中学校
戦争と人権 文京区立第三中学校
どうしたら救えたのか 北区立桐ヶ丘中学校

嫉と虐待 桜丘中学校(北区)
新たな世界へ 荒川区立南千住第二中学校
気づけなかったSOS 品川区立立浜川中学校
心の傷は紙のしわ 大田区立羽田中学校
児童婚を知る 世田谷区立駒留中学校

障がいも魅力の一つ 渋谷区立上原中学校
私らしく生きる。 東京女子館中学校(渋谷区)
ありのままの自分を大切に (非公表)
思いやりを胸に 目黒区立大島中学校

言葉を話せる事は幸せ 目黒学院中学校(目黒区)
不当な差別とみんなの笑顔 都立富士高等学校附属中学校

千代田区立九段中等教育学校	三年	田端	あかり
中央区立佃中学校	三年	栗原日彩	
中央区立佃中学校	三年	田尻健治	
中央区立日本橋中学校	二年	渡邊すみれ	
新宿区立落合中学校	二年	山田くるみ	
学習院女子中等科(新宿区)	三年	下野理央	
台東区立柏葉中学校	三年	西尾癒菜	
文京区立第三中学校	二年	宮下鉄平	
北区立桐ヶ丘中学校	二年	千原若奈	
桜丘中学校(北区)	三年	酒井一光	
荒川区立南千住第二中学校	一年	岡部一翔	
品川区立立浜川中学校	七年	溝口優真	
大田区立羽田中学校	三年	大塚璃心	
世田谷区立駒留中学校	二年	徳光紗羽	
渋谷区立上原中学校	二年	山中美月	
東京女子館中学校(渋谷区)	三年	森菜々子	
(非公表)	三年	(非公表)	
目黒区立大島中学校	二年	梅澤ひかり	
目黒学院中学校(目黒区)	三年	三ツ橋永悟	
都立富士高等学校附属中学校	二年	福地百優	

外国人への差別をやめよう

ADHDって知っていますか？ 中野区立北中野中学校
言葉の受け取り方 中野区立北中野中学校
日常をうばった震災 中野区立中野東中学校
自殺を「受け止める」 杉並区立阿佐ヶ谷中学校
気が付けていなかったこと 杉並区立松溪中学校
小さな枠の男女差別 杉並区立杉森中学校
考えることを考える 豊島区立千川中学校
「当たり前」の無い世界 板橋区立桜川中学校

普通って何？ 練馬区立中村中学校
新しいスタートライン 練馬区立光が丘第二中学校
彩りのある社会へ 東京学芸大学附属国際中等教育学校(練馬区)
立場を変えると気づくこと 足立区立鹿浜菜の花中学校
助け合える社会へ 足立区立東島根中学校
行動ではなく思考 墨田区立吾嬬第二中学校
僕のセクシャリティ 葛飾区立上平井中学校

加害者家族 江戸川区立西葛西中学校
同じ町の人として 江戸川区立西葛西中学校
『ちがいを』を認める優しい社会 江戸川区立瑞江第三中学校

中野区立北中野中学校	二年	神田梓恩	
中野区立北中野中学校	二年	野邊咲耶子	
中野区立中野東中学校	二年	奥田杏菜	
杉並区立阿佐ヶ谷中学校	一年	吉田暖	
杉並区立松溪中学校	二年	池田春華	
杉並区立杉森中学校	二年	吉成智陽	
豊島区立千川中学校	三年	成本桜子	
板橋区立桜川中学校	二年	西山遥	
練馬区立中村中学校	二年	関根萌望子	
練馬区立光が丘第二中学校	二年	中野志帆	
東京学芸大学附属国際中等教育学校(練馬区)	三年	田坂美麗亜	
足立区立鹿浜菜の花中学校	三年	佐藤涼香	
足立区立東島根中学校	三年	後藤愛佳	
墨田区立吾嬬第二中学校	二年	杉原菜陽	
葛飾区立上平井中学校	二年	山崎結梨	
江戸川区立西葛西中学校	二年	藤本奈知	
江戸川区立西葛西中学校	二年	森一樹	
江戸川区立瑞江第三中学校	三年	田中アフロディター	

入賞作品一覧

話せる環境の大切さ	八丈町立大賀郷学園大賀郷中学校	三年	須貝夢羽
ありのままを受け入れる	新島村立式根島学園式根島中学校	三年	高久心暖
ヤングケアラーについて考えた事	三宅村立三宅中学校	一年	林 千夏子
普通の肌とは	小笠原村立小笠原中学校	二年	根本 瑚々菜
「意外と便利？」	青ヶ島村立青ヶ島中学校	二年	板倉 詩
人権について	利島村立利島中学校	一年	五味 咲月
誰もが生き生きと暮らせる社会へ	立川市立立川第一中学校	二年	三島 穂紀
僕はALLEY（アライ）です	立川市立立川第二中学校	二年	荒井大河
日本人として	立川市立立川第四中学校	一年	新田 悠斗
人権って何だろう？	昭島市立多摩辺中学校	二年	奥 貞 葵
戦争と人権／人々の人権を守るために	東大和市立第一中学校	二年	山田 紗和子
高齢化社会で自分たちができること	東大和市立第五中学校	二年	久保田 陽菜
「関係ない」人はいない	武蔵村山市立小中一貫校大南学園第四中学校	三年	今井 公河
自分らしく学校を送れたのは	八王子市立石川中学校	一年	真下 寛久郎
身近の人にもいる	八王子市立加住中学校	三年	鈴木 唯仁
人権問題は身近に	八王子市立柵田中学校	三年	伊藤 悠海
いじめはダメ	八王子市立第五中学校	一年	吳 俊燁
分かり合おうとする努力	八王子市立鎌水中学校	三年	大矢 菜夢

小さな社会／気付く力と勇氣	八王子市立鎌水中学校	二年	金内 莉央
ハンセン病の歴史と、人間らしく生きるということ	日野市立大坂上中学校	三年	佐々木 心
認め合い、受け入れること	日野市立七生中学校	三年	徳永 芽生
言葉の表裏	日野市立平山中学校	一年	林 瑛斗
自分のためにみんなのために	町田市立小山田中学校	二年	北原 光生
変わっていても	町田市立堺中学校	二年	小林 紗藍
相手を知ること	町田市立堺中学校	二年	寒川 宮瑠実
平和な世界をめざして	町田市立南大谷中学校	一年	長谷 彩子
一年間で学んだこと	町田市立南成瀬中学校	一年	木戸口 夏花
人として当たり前のこと	稲城市立稲城第五中学校	二年	加藤 峻平
自分らしく生きること	稲城市立稲城第六中学校	二年	高向 絢音
行動で生まれる人権	多摩市立諏訪中学校	一年	斉藤 大悟
一人一人が輝ける世界	多摩市立青陵中学校	二年	松元 優奈
みんなが自分らしく生きていくために	多摩市立聖ヶ丘中学校	二年	福井 くるみ
個性を潰さないで	府中市立府中第二中学校	一年	石崎 杏
違いと個性	府中市立府中第六中学校	一年	箱崎 花菜
(無題)	府中市立府中第六中学校	二年	小林 悠悟
やさしい差別	小金井市立緑中学校	三年	尾崎 なな子
誰もが自分らしく生きるために	国分寺市立第一中学校	二年	成瀬 真優
愛	国立市立国立第二中学校	二年	森川 日陽
高齢者と一緒に	国立市立国立第三中学校	二年	松本 円

盲導犬とならでること

ちっぴけな世界	武蔵野市立第三中学校	二年	熊谷祐藝
魔法の使い方	三鷹市立第二中学校	二年	上野彩恵
国境を越えて	三鷹市立第二中学校	二年	西木莉子
障がい者の感情と人権について思ったこと	三鷹市立第二中学校	二年	ハチエットスミシ
人権侵害を仕方ないと思わないために	調布市立調布中学校	二年	田中仁太
やまゆり園事件と障害者の人権	調布市立調布中学校	二年	田中楓花
「いじめ」の定義 (非公表)	狛江市立狛江第四中学校	三年	馬場夏輝
声をかける勇氣をもつて	小平市立上水中学校	二年	道上心音
災害と人権	東村山市立東村山第二中学校	二年	田沼藍子
一人一人の個性	東村山市立東村山第七中学校	二年	矢花りお
いじめをなくすためには	清瀬市立清瀬中学校	三年	甲斐匠
世界で飛び交う人種差別	東久留米市立南中学校	二年	江畑美玖
「遠く」が輝く世界へ〜 Ryuchellさんの死が教えてくれたこと〜	東久留米市立南中学校	二年	横須賀絵莉
平等に、幸せに	西東京市立田無第一中学校	二年	山本唯
人と人との関わり方	西東京市立保谷中学校	二年	稲付くるみ
自分の経験から考えたこと	西東京市立明保中学校	一年	黒岩朋佳
相手を知ること	あきる野市立秋多中学校	三年	岡田優愛
人生の先輩と共に	あきる野市立御堂中学校	二年	中井真里花
帰国子女の私が伝えたいこと	青梅市立新町中学校	二年	齊藤美波

外国人の人権に関する問題

(非公表)

目の前の相手を大切にすること	福生市立福生第一中学校	二年	末永文
原爆から考える一人権と戦争	福生市立福生第三中学校	二年	村野颯真
戦争によって起きる人権問題について	羽村市立羽村第三中学校	三年	栗田隼希
障害のある人が暮らしやすいよい社会にするために	日の出町立平井中学校	一年	一ノ瀬七海
辛かったあの頃の自分と今の自分	奥多摩町立奥多摩中学校	三年	田中柚華
差別のない世界へ	檜原市立檜原中学校	一年	富田真昼

※作者の希望により、一部非公表としている箇所があります。